

歯学部ニュース

令和6年度第2号（通算146号）

特集 歯学部卒業おめでとう
歯学部生の活動
留学に行こう

目次

特集1 歯学部卒業おめでとう	1
学部長から 井上 誠	
副病院長から 多部田康一	
卒業生のことば 五十嵐貴洋・金城こころ・角屋知佳子・竹内 碧衣・山内 嬉子	
大学院修了にあたり	9
小出 耀・相澤 有香・桜井 花菜	
臨床研修修了にあたり	12
與儀古都乃・湯浅 恵伍	
特集2 歯学部生の活動	14
学生短期海外交流プログラム（SS・SV）	
石田 陽子・清水 香奈・平岡 望々・宮田 優奈・石塚 萌絵・山田 珠詩	
歯学部生の今	
吉川 陽向・中塚 莉乃・藤岡 侑剛・長谷川綾音・西脇己太郎・富永 彩愛	
山本麻衣花・賀来 穂高・平野 那知・川邊樹実花・渡邊 桃子・井山 七海	
歯学部のデジタルデンティストリー	33
長澤麻沙子・堀 一浩・佐藤 拓実・中島 努	
特集3 留学に行こう	38
吉原 翠	
総務委員会だより	39
井上 誠	
部活動紹介	42
バレーボール部 久田 峻也・軟式野球部 岡本 啓	
早期臨床実習を終えて	44
濱 航太・吉田 百花・高橋 美優・阿部 愛未	
ポリクリを終えて	46
市川 華帆・土谷 瞭斗	
学会受賞報告	48
羽賀 健太・Quang Nguyen Van・大川 純平・善本 佑・高野日南子・Min Thu Ya・青木 直美	
素顔拝見	55
市木 貴子・笹 杏奈・小林 亮太・菊池 裕子・土橋 梓	
留学生紹介	60
Tran Thi Thuy Diep	
退職によせて	63
前田 健康・川瀬 知之	
技工部だより	68
田中 正信・荒井 秀明	
論文紹介	70
岡本圭一郎	
新潟歯学会報告	71
竹原 祥子	
同窓会だより	72
加藤 幸生	
教職員異動	74
ミニコラム	76
歯学部を支える方々 坂上 亮	
編集後記	77



歯学部卒業おめでとう

新潟大学歯学部長 井 上 誠

歯学科第55期生、口腔生命福祉学科第18期生の皆さんへ、ご卒業おめでとうございます。今年度めでたくご卒業される皆さんに、全教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、保護者をはじめご家族の皆様方におかれましても、無事に卒業の日を迎えることができましたことを心よりお祝い申し上げます。

新潟大学歯学部は、1965年4月1日に、東京医科歯科大学、大阪大学に次いで、日本海側初の歯学部として東北大学、広島大学とともに、日本で3番目の国立大学歯学部として設置され、2025年には60周年を迎えようとしています。この間、3,000名を超える卒業生を輩出し、歯科医療、歯科医学の教育、研究、社会貢献という見地から、全国に誇る「知の拠点」としての役割を果たしてきました。今年度ご卒業される皆さんが、その一員として社会に羽ばたく日を迎えられることを本当にうれしく思います。

皆さんが過ごされてきた4年間、6年間の学生生活を振り返るにあたり、2020年以降、世界を震撼させてきた新型コロナウイルス（COVID-19）パンデミックとの関わりを抜きには語れないと思います。結果的には、対面での講義や実習が滞ったのは2020年のわずかな時期のみでした。しかし、キャンパスライフの中では、友人や家族との交流、部活動、さらに社会との交流が大きく制限されてしまい、出口が見えない中で日々を過ごさねばならなかった皆さんの不安はいかばかりであったかと察します。私たち教職員も、自らの感染予防に注意を払いながらのリモート講義や非対面での指導などは経験のないものであり、結果的には

デジタル・リモートの活用を始めとする新たな手法を得たとはいえ、試行錯誤の日々であったと思います。

近年の新潟大学歯学部の環境変化は、COVID-19をきっかけとした社会の変貌を伴うものだけではありませんでした。歯学教育や歯科医療技術を含めて、歯科を取り巻く環境は毎年のように目まぐるしく変化し、教職員にあってもこれらの変化に対応すべく日々精進してきました。新潟大学歯学部では、学生自らが主体的に学びを得る学習システムを先導的に推進し、歯科医師に求められる能力の育成を重視したコンピテンシー・ベースの教育、知識、スキル、態度・価値観を統合し、与えられた課題から学生自ら問題を見出し、解決策を立て実行するという問題発見・解決学習と、その学習成果を把握するパフォーマンス評価の開発・導入を行い、現在でも必要な修正を続けながらアップデートしています。皆さんが当然のように経験したPBLやトリプルジャンプなどの教育スタイルを全国に先駆けて行ってきたのは新潟大学歯学部なのです。また、2024年1月の歯科医師法の改正により、法律に基づいて歯学生が臨床実習において歯科医師の指導監督の下、歯科医業を行うことができることになりましたが、これも新潟大学歯学部では、独自に考案した主治医制度の下、歯科臨床教育学分野を中心としてこれまで一貫して診療参加型臨床実習を継続していたものであり、国立大学法人評価において、国立大学歯学部で唯一「特筆すべき高い質にある」と評価されているのです。

2023年5月8日にCOVID-19が季節性インフル

エンザと同じ五類感染症に位置づけられて以降、日常における感染対策を意識しつつも、収束後の日本は社会・経済ともに予想されるフェーズを異にする新たな社会・経済へと不可逆的な進化を遂げているように思えます。長年にわたる慣行・慣習が崩されるとともに、デジタル化・リモート化を前提とした活動がシフトから定着に向かい、人員削減や効率化が重視されるようになり、個人、団体、社会といったあらゆるレベルにおいて変革が生まれています。その中で皆さんは、競争が激

化している社会において高い評価を得ている新潟大学歯学部卒業の日を迎えました。私たち教職員は、皆さんが設備、教員、カリキュラムなどいずれをとっても恵まれた環境の中で、これからの社会で活躍するために必要な知識、技能、態度が培われたこと、そのすべてはCOVID-19パンデミックにも負けなかったのだと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという高い誇りを胸に、大いに活躍してください。Bon voyage!





卒業を祝して

医歯学総合病院副院長（歯科総括） 多部田 康 一

歯学科55期生・口腔生命福祉学科18期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。長きにわたる努力の末、新潟大学歯学部教育課程を修了し、学士の学位を取得された皆さんとそれを支えてこられたご家族、ご親族の皆様に心からお祝いを申し上げます。

皆さんは歯学部への入学前後に新型コロナウイルス感染症のパンデミックという特異な時代を経験した世代です。感染症による日常生活の変化や価値観の多様化、そこに生じる精神的なストレスも経験しました。この厳しい環境下で学び成長した皆さんは、これから歯科医療や社会福祉の分野で活躍するに必要な、社会的視野を備えた世代といえるでしょう。これまで皆さんは、歯学部において歯科医学、口腔保健医療・福祉学の重要な知識と基本技能を習得し、不変の土台を築くための学びを重ねてきました。これからは現場での経験を通じて、成熟したプロフェッショナルへと成長してゆく必要があります。是非ともその挑戦の過程を楽しみ、自己の研鑽を継続してください。

今後10年、20年後の社会は確実に変化します。少子高齢化の進行、疾病構造と医療ニーズの変

化、さらにはグローバル化や多文化対応の必要性を含めて歯科医療需要の形態は変わるでしょう。歯科医療はAIの影響が少ない分野とされていますが、その在り方も技術革新で変化するかもしれません。柔軟性と適応力をもってプロフェッショナルとしてのアップデートを怠らぬことが重要です。一方、優れた良き医療人として社会貢献することの価値は時代によらず普遍です。社会のため、患者さんのために働く奉仕の精神は、医療職に携わる皆さんの誇りを高め、仕事のやりがいを生み、皆さんの人生をより豊かにするものと信じます。

本学歯学部の卒業生の皆さんには、各々の分野で専門職業人としての尽力によって社会を支えるとともに、現在の医療技術や医療・社会福祉システムの発展や新たな創造も目指していただきたいと思います。若さと積極性を活かし、既成概念に囚われぬ挑戦により、自己実現とともに社会に貢献されることを願います。新潟大学歯学部・医歯学総合病院の教職員一同、皆さんの活躍を心より応援しています。

卒業生のことば

卒業にあたり

歯学科6年 五十嵐 貴洋

この度、歯学部ニュースを執筆させていただくこととなりました歯学科6年の五十嵐貴洋です。今までの歯学部ニュースを拝読しており、執筆依頼が来た際には、とうとう自分の番が来たかと思いました。この機会に歯学部で過ごした6年間を振り返っていかと思います。拙い文章ではありますが、少しの時間お付き合いください。

1年生の頃は、そこまで勉強は難しくなく、大変自由な時間を過ごすことが出来ました。2年生になり、より専門的な学習が始まり、最初の方は勉強についていくのがやっとでした。学年を上がるごとに覚える量は多くなり、内容も難しくなり、この6年間で数え切れないほどの再試験を受けたと思います。もう少し真面目に講義を受けて、勉強すれば良かったと反省しております。

無事進級することができ、5年生後期から臨床実習が始まりました。この臨床実習が6年間で一番印象に残り、忘れることが出来ないほどの濃い時間になりました。先輩からの引き継ぎが終わり、1人での診療が始まると不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、自分でやるしかないと気持ちを切り替え、教科書や参考書、論文、使用材料の添付文書などを予習して実習に望んでいました。実際に患者さんへの処置をすることで、技術や術式、知識に関して理解も深まりました。また、先生方の手技を間近で見ることで、ポジショ

ンや一つ一つの細かいテクニックだけでなく、医療者としての心構えなど学ぶことが出来ました。

臨床実習を通して、診療において最も重要なことは、問題・主訴に対してどういったアプローチをするべきか導き出すことだと考えました。問題・主訴に対して原因を突き止め、その原因を解決するために筋道立った治療をしないといけません。このような思考プロセスを養うことが本実習の目標とし、日々愚直に前進しました。少しは成長出来たのではないかと思います。

最後に、大変な臨床実習を乗り越えることが出来たのは、55期の仲間たちのおかげだと思います。辛い時や、行き詰った時、悩んだ時、怒られた時に、励ましてくれたり、笑わせてくれたりといつも気持ちを楽にさせてくれました。本当にありがとうございました。また、お忙しい中、ご指導くださった先生方に深く感謝申し上げます。この貴重な経験を糧に、歯科医師国家試験に合格し、今後より一層精進してまいります。



筆者最前列左から1番目

卒業生のことば

歯学科6年 金城 ころこ

このような表題の原稿を書かせていただくにあたり、もう入学から6年も経ったのか、と大変感慨深いです。6年前に地元を離れ新潟に来て、ごはんとお酒の美味しさに感動し、そして冬の天気悪さに絶望したことが懐かしいです。

新潟大学歯学部で過ごした6年間は、私にとってあっという間であり、またかけがえのない時間でした。振り返ると、この大学生活の全てが貴重な経験でした。その中でも最も印象深いのは、やはり5年生後期からの臨床実習です。

新潟大学は全国でも数少ない診療参加型の臨床実習であり、自分が主治医として実際に患者さんを治療することができます。当然ですが、それまでの模型実習とは全くの別物でした。始めの方は、診療前日は緊張で眠れず、診療中も口腔内診査の際にはミラーを持つ手が震えていました。協力してくださった患者さんには、時間が長くなってしまったり、診療がスムーズにいかなかったりと、ご迷惑をお掛けしましたが、どの患者さんも温かく見守ってくださいました。患者さん一人ひとりに真摯に向き合い、治療計画を立て、実際に治療を自分の手で行うという、貴重な経験を積むことができました。毎診療、事前に教科書や講義資料を読みレポートを作成し、先生とのディスカッションを行い、診療後には反省と振り返りを欠かさずに行いました。診療内容の暗記ができずプレチェックを4回行ったことも、ブリッジテック調整が全く終わらず泣きそうになったことも、今では良い思い出です。お忙しい中、時間を

かけて何度も指導してくださった先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。この臨床実習では診療技術だけでなく、精神的にも大きく成長することができたように感じます。最後の診療で患者さんから「あなたに担当してもらえて良かった」と言ってもらえたことは、この先も一生忘れることはないと思います。

最後になりますが、この6年間、私は多くの方々に支えられ、学び、成長することができました。親身になって指導してくださった先生方、共に学び合った同期、そして支えてくれた家族や友人たちには、心から感謝しています。卒業後、歯科医師として社会に貢献できるよう、日々努力を惜しまず、患者さん一人ひとりに対して真摯に向き合っていきたいと思います。

卒業と共に歯科医師として新たな一歩を踏み出す私たちを、今後とも温かく見守り、応援していただけますと幸いです。



実習最終日に撮影（筆者前列右から2番目）

6年間を振り返って

歯学科6年 角 屋 知佳子

この度歯学部ニュースの執筆という貴重な機会を賜りました、歯学科6年の角屋知佳子と申します。先日、長いようで短かった1年間の臨床実習を無事に終えることができました。新潟大学に入学してから今日までの日々を振り返り、卒業生のことばとさせていただきたいと思います。

2019年、新生活に期待に胸を膨らませ地元茨城から新潟に越してきました。新潟はいつも曇天で、6年間元気に過ごせるのだろうかと心配になったことを覚えています。2020年以降は新型コロナウイルスが猛威を振るい、キャンパスを移動してせっかく始まった基礎科目のほとんどがオンライン授業になりました。覚えること、理解することが多く複雑で、受け身で勉強するだけではないと実感する日々でした。実習では、自分の不器用さに悩みながら、同期の友達と協力したり、何度も先生方に見ていただいたりして、少しずつ力をつけることができたと思います。最近ロッカーの整理をしていて当時の製作物を見返す機会がありましたが、臨床の場で適切に診療ができたのは、基礎実習で十分に技能を獲得できてい

たからだと感じました。

そして、5年次後半から始まる臨床実習はこれまでの集大成として大きな学びとなりました。今までは模型で行っていたことを、実際の患者さんに対して行うということに最初は不安を感じていましたが、「治療してくれて助かった」、「あなたが担当してくれてよかった」と話す患者さんの笑顔が見られたことは嬉しい思い出です。また、患者さんの体調不良によって立案していた治療計画通りに診療を進めることができず、人を相手とする職業の難しさを実感したことも印象に残っています。

私は、6年生になるまで自分の将来像について具体的なイメージができていませんでした。しかし、卒業後の臨床研修先決定のために各施設を見学し、臨床実習でさまざまな専門診療科を体験したことは、将来について深く考える良い機会となりました。在学中で将来について不安を抱えている方には、焦らなくても自ずと興味があることは見つかるよと伝えたいです。

最後になりましたが、これまで支えてくださった先生方、大学関係者の方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。これからも、新潟大学で学んだことを心に留めて日々精進していきます。



臨床実習終了後に55期ポーズで（筆者下から2段目左端）

感謝の4年間

口腔生命福祉学科4年 竹内 碧衣

この度、「卒業生のことば」を執筆させて頂くこととなりました、口腔生命福祉学科4年竹内碧衣です。執筆のお話をいただいた時、もうそんな時期かとハッとしました。この大学生活も終わりが近いのだと改めて感じ、少しの達成感とともに大きな寂しさが襲ってきています。今回このような機会を頂きましたので、私の大学生活について振り返ってみようと思います。ぜひご一読いただければ幸いです。

私の大学生活での1番の思い出は、自分の夢を見つけたことです。私は入学当初、明確にやりたいことがありませんでした。国家資格を2つ取って安定した職に就きたいとぼんやり考えていました。しかし、3年生の春、福祉実習で現場を知ること、福祉分野にとっても興味を持つと共に福祉分野に残る多くの課題を実感しました。その時私は、福祉についてもっと知りたい、福祉をもっと世間に広めたいと思うようになりました。そして、これが本当に自分のやりたいことだと、私の夢だと確信しました。やりたいことも無く入学した自分が、夢を見つけて卒業できることをとても嬉しく思います。夢を与えてくれたこの新潟大学に感謝します。

そして、この4年間で振り返ると、やはり4年

生としての1年間で特に印象的だと感じます。臨床実習を軸に、福祉実習や国試対策、特論や就活を同時に走らせながらの生活だったので、今までより格段と忙しく、めまぐるしい毎日でした。自分が本当にやりたいことは何なのか考える日々、勉強不足を痛感し落ち込む日々、明日が憂鬱だと思う夜もありました。しかし、それでも足を止めずに歩いてきました。苦しみや悩み、葛藤たちが導火線となり自分を強くしてくれました。この経験は私にとってかけがえのないものであり、この先もずっと私を支えてくれることと思います。そして、もちろん楽しいこともたくさんありました。友人たちと何気ない会話で盛り上がったり、勉強や実習を頑張った日には美味しいご飯を食べたり旅行に行ったり、時には互いの将来や悩みについて語り合ったりしました。その共に過ごした時間が、何よりの宝物だと思います。18期生の皆は、本当に真面目で一生懸命でいい人たちばかりで、毎日毎日支えられてばかりだったように思います。18期生の皆、ありがとう。皆の未来が明るく輝くことを心から祈っています。

最後になりますが、改めて4年間で指導していただいた口腔生命福祉学科の先生方をはじめ、病院の先生方、歯科衛生士さん、すべての方に大変感謝申し上げます。ありがとうございました。新潟大学の卒業生であることを誇りに、これからも精進して参ります。



口腔生命福祉学科18期生（筆者前から2列目の左端）

卒業生のことば

口腔生命福祉学科4年 山内 嬉子

大学生活も残り4ヶ月となり、二年間の時の流れの早さを強く実感しています。私は編入学当初、大学病院での臨床実習ではどれだけ高度な知識と技術が求められるのか、既に形成された人間関係の中に溶け込めるのか、という大きな不安を抱いていたことを覚えています。しかし、今現在その不安は代えがたい自信と思い出へと移り変わりました。

大学病院での臨床実習では、教科書でしか見られなかった多くの症例や治療法を実際に自分の目で見ることができ、歯科への追求心がますます大きくなっていきました。そして、歯科医師・歯科衛生士の方々の、患者様お一人お一人を大切にされた丁寧な歯科医療の提供には毎回感銘を受けました。また診療に追われる中でも、常に熱心にご教授してくださり質の高い学びを得ることができたことに感謝しております。今後も口腔衛生管理のプロフェッショナルとして責任を持ち多くの人々の口腔内に介入していくために、現状の知識と技

術に満足することなく自己研鑽に励んでいきたいと思います。

社会福祉現場実習では、一ヶ月間障がい者施設に行かせて頂きました。障がいのある方と関わるのは初めてで、距離感やコミュニケーションの壁にぶつかりました。頭の中では自分と変わらない人間であると分かっていても、どうしても構えてしまい障がい者福祉の難しさを実感しました。しかしそれと同時に、障がい者の方から多くの学びや喜び、幸福感を共有してもらい、支え合いとはこのようなことだと理解することができました。障がい者のみに関わらず誰にとっても生きやすい社会を創り出すために、社会の一員として責任をもって考えていかなければならないと気付かされた実習でした。

臨床実習、特論作成、就職活動、国家試験勉強と忙しい一年でしたが、その中でも高い志を持って和気藹々と共に励んできた口腔生命福祉学科4年生の皆には感謝で一杯です。教室でのクラス会は最高の思い出となりました。今後は、それぞれ別々の道にはなりますが、学生生活で得られた繋がりを大切にしながら新しいスタートを切っていききたいと思います。



実習後半期に撮影（筆者1列目左端）

大学院修了にあたり

大学院修了にあたり、感謝を込めて

生体歯科補綴学分野 4年 小 出 耀

新潟大学大学院での4年間で歯科医師としての礎ができました。これこそ私にとって生涯の宝だと感じています。携わらせていただいた臨床、教育、研究を通して私が具体的に学ばせていただいたことを述べさせていただきます。

「臨床」

毎週行われる医局の症例検討会では、咬合崩壊した患者の治療方針や治療計画などを、若手から上級医まで多くの先生方と議論させていただくことができました。これにより、現状把握のための病態診断、予知性の高い治療目標の設定、そして再発防止のためのメンテナンスに至るまで、正確な検査・診断能力が不可欠であることを痛感しました。特に、一口腔単位で治療計画を的確に立案することが、歯科医師にとって非常に重要であると日々教えていただきました。

魚島教授の診療見学では、補綴治療が患者のQOL向上に大きく貢献し、笑顔を取り戻す姿を数多く目の当たりにし、深く感銘を受けました。歯科医師の果たす役割の大きさや可能性を学ばせていただき、患者にとって最善の治療を提供できる歯科医師になりたいという思いが湧いてきました。

「教育」

当分野が担当する学生実習は、歯冠崩壊や少数歯欠損など、様々な問題を抱えた症例を想定した顎模型を提示し、学生に治療計画の立案から実際の治療までの過程を自分で考えながら構築するものでした。学生が歯科医師としての基礎的な知識と技術を確実に習得し、将来の臨床で活かせるように効率良く組まれていて、一人一人が着実に成長していく姿は、指導する立場として心から喜び

を感じるものでした。私自身も学ぶことが多く、素晴らしい実習に参加させていただいたことに感謝しております。

「研究」

私の研究テーマは、「異なるジョイント様式におけるアバットメントの繰り返し締結がスクリュー形態および除去トルクに及ぼす影響」でした。インプラント治療において、アバットメントスクリューの緩みや破損は、治療の成功率を大きく左右する重要な問題です。本研究では、様々なジョイント様式のインプラントを用いて、繰り返し締結がスクリューの形態や除去トルクに与える影響を分析し、明らかにすることができました。

2023年に開催された日本口腔インプラント学会学術大会で発表し、優秀ポスター発表賞を受賞することができました。この受賞は、ひとえにご指導いただいた魚島教授、長澤先生をはじめとする当分野の先生方、そして実験に協力してくれた友人Kooanantkul Chuta先生のお陰であると、心から感謝致しております。

最後になりますが、この4年間、情熱を持ってご指導いただいた魚島教授をはじめ当分野の先生方、お世話になったスタッフの方々に厚くお礼申し上げます。今後も歯科医師人生をより輝かせて行けるように、日々邁進して行く所存です。

皆様方の益々のご活躍を、心よりお祈り致します。有難うございました。



日本口腔インプラント学会学術大会にて受賞

大学院修了にあたり

顎顔面口腔外科学分野 相澤有香

私は、学生の頃から口腔外科学分野に興味と憧れがありました。専門性をもち、基礎研究を通して科学的思考を養いたいとの理由から、新潟大学卒業後の大学院進学を漠然と決めていたものの、卒後研修の1年間は県外で挑戦し一般歯科診療を広く学べる最後の機会と感じ、東京医科歯科大学での総合診療研修を選びました。コロナ禍の最中ではありましたが、毎日が刺激的で新たな学びにあふれており、充実した日々を過ごしました。

大学院に入学し、1年目は外来、病棟と歯科麻酔科での実臨床を通し研鑽を積みました。憧れて入学したとはいえ、口腔外科というこれまでと全く異なる環境での日々は時に苦しくもありましたが、先生方に親身にご指導いただき、新たな知識や手技が増えていく実感と、少しずつですが治療に貢献できるようになっているという喜びを原動力に励むことができたように思います。また、口腔外科学会等での学会発表や論文投稿を経験し、知見を広げる楽しさを感じることができました。

そして、生体組織再生工学分野にご縁をいただき、2年次から基礎研究を開始しました。正常口腔粘膜・口腔癌病態共存モデルの開発、足場の硬さをパラメーターとした口腔粘膜上皮細胞シートの特性解析、という2つの大きなテーマを軸に、口腔粘膜のティッシュエンジニアリングや再生医療に関する研究に携わらせていただきました。細胞中心の生活は楽しく、時間を忘れて研究することができました。自分の無力さや未熟さをもどかしく、時に不安に思いながらも、毎日継続する中で稀に小さな成長や成功を感じ、新たな発見を通して理解が深まる瞬間があり、改めて研究のおもしろさや奥深さに惹かれ意欲がわいてくることの繰り返しだったように思います。知識を深め、研究が進むにつれて世界がひろがっていくということが、新鮮な驚きでした。Kenji先生をはじめ様々な専門分野の先生方に熱心にご指導いただきました。国際学会や論文の発表、国際特許の出願など、たくさんの得難い経験をさせていただいた

ことも印象に残っています。

在学中には、口腔外科や現在の研究テーマを超えて大学院講義を受講する貴重な機会をいただき、歯科学の幅広い学習を積極的に深めることができました。また、様々な地域の病院歯科、開業歯科医院の先生方にも出張でお世話になり、多くを学ばせていただきました。

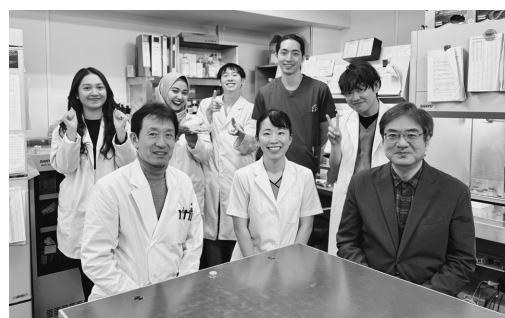
私にとってこの4年間は、どのような歯科医師でありたいかを考える期間ともなりましたが、振り返れば当初は「これでいいのか」という迷いや悩みの中にありました。折に触れて多くの先生方にお話をうかがい、今の自分ができること、目指したい姿を再確認して、選んだ道を正解にするよう歩いてきたように思います。不思議なもので、悩みぬくと心機一転、表情の変化を指摘されるほど新たな気持ちで向き合うことができました。3年次で次世代プロジェクトに出願、採用されたことも転機となりました。

今後も、臨床、研究を通して社会に貢献できるよう、さらに精進していく所存です。

最後になりましたが、富原圭教授、泉健次教授をはじめ、ご指導いただきました先生方に、心より御礼申し上げます。そして、同期や後輩、家族にも感謝しております。ありがとうございました。



タイで顎顔面口腔外科学分野の先生方と（著者右から2番目）



生体組織再生工学分野の先生方と（著者中央）

大学院修了にあたり

口腔生命福祉学専攻博士前期課程
桜井花菜

口腔生命福祉学専攻博士前期課程2年の桜井花菜と申します。この度、歯学部ニュースの寄稿依頼をいただきましたので「大学院修了にあたり」というテーマで執筆させていただきます。

大学院に進学することを視野に入れたのは、学部生4年の秋頃でした。それまでは進学することなんて全く考えていませんでしたが、卒業が近づくにつれ「もう少し専門的な分野を学んでみたい」と思うようになったのがきっかけだったと思います。

私は、2023年4月に新潟大学医歯学総合病院に就職し、歯科衛生士として働きながら社会人大学院生として博士前期課程に進学させていただきました。社会人と大学院の両立は、時間がうまく取れないという点で、とても大変な思いをすることが多かったです。しかし、幸い職場の目の前が歯学部であり、職場の同期が同じ大学院に通っていたので、同期と協力して励まし合いながら、勤務後に大学院に行き、少しずつですが研究を進めてきました。

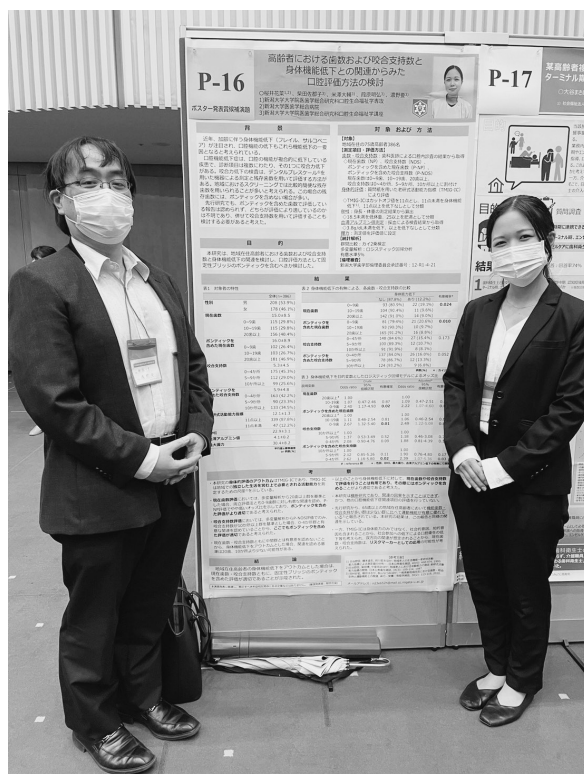
私は「高齢者の歯数および咬合支持数と身体機能低下の関連」をテーマとして、研究に取り組みました。大学院生になり初めて自分で取り組む研究であり、研究の進め方や解析方法など、最初は何もわからず戸惑うことばかりでしたが、担当の先生方は初歩から優しく指導してくださいました。

実際に研究をしてみると、論文に取り掛かるまでが想像以上に大変だったことがわかりました。データの分類から、解析、参考文献探しと初心者の私にとっては時間のかかるものばかりでした。

途中、結果が出なかったり方向性を見失ったりと研究に行き詰まり、辛いと感じることもありましたが、先生方のご指導や同期の励ましのおかげで最後まで尽力することができました。

2年間は思っていたよりもあっという間に終わってしまいました。社会人ということもあり、時間のない中での研究でしたが、その中で人生初の学会発表も経験させていただきとても有難く思います。この大学院生活は振り返ってみると大変な思い出の方が多かったと感じますが、このたくさんの経験のおかげで自分としては大きく成長できたと感じています。

最後に、研究を進めるにあたり、ご指導をいただいた先生方に改めて御礼を申し上げます。大学院での経験を活かして、これからも精進していきたいと思います。



2024年新潟開催の
日本歯科衛生学会第19回学術大会にて（筆者：右）

臨床研修修了にあたり

臨床研修修了にあたり

Aコース臨床研修歯科医 與 儀 古都乃

2024年度臨床研修Aコースで研修歯科医としてお世話になっている、本学54期生の與儀古都乃と申します。今回このような原稿を書く機会を与えて頂いたので、研修生活について振り返ってみたいと思います。

まず私がAコースを選択した理由ですが、自分が担当医として一口腔単位で治療計画を考え、診療したいと思ったことが一番の理由でした。まずこの卒後1年間は専門分野に特化することなく、一般歯科治療の土台となる基礎の部分をじっくり学びたいと考えていました。

臨床研修が始まる前は、総合診療部での研修は学生の臨床実習の延長になってしまうのではないかとという不安も正直ありました。でも、いざ診療が始まるとそのような気持ちは吹き飛びました。歯科医師免許を取得した以上、責任を持って診療に取り組むべきだという意識が高まり、患者さんに対してより良い医療を提供したいという強い思いを抱くようになりました。

診療が始まって、特に学生との違いを感じたのは時間の使い方でした。学生時代には3時間という制限時間の中で、目の前の処置をいかに効率よく進めるかに焦点を当てて診療を行っていました。しかし、研修歯科医になってからは、1時間半という限られた時間内で処置を何分で終え、次にどのような手順を踏むべきか、また中断する場合はどのタイミングが適切かを考えながら診療を進めるようになりました。初めのうちは、この時間の配分が非常に難しく、診療時間内に終わらないこともありましたが、時間を意識し、自分のペースを診療の中で掴むことで、徐々に効率的に時間を活用できるようになってきたと感じています。

また、係の仕事がある日は、急患対応したり先生方のアシストにつくのですが、アシストから学べることもたくさんあることに気づきました。アシストに付くときは小さなところも見逃さず、自分の診療で困ったときや疑問に感じた事をどう対処しているのか、例えば、ポジショニング、患者様の頭の角度、診療を早く終わらせることが出来る工夫など色々なところを観察しました。

総合診療部以外の場所でも病棟、摂食・嚥下リハ室、顎関節治療部にて研修を行いました。そこでは普段、総診では経験することができないような全身疾患を持った方や高齢者への治療や外科的技術を学ぶことができました。

臨床研修1年間は私にとってとても大きかったです。歯科のことはもちろん、それ以外にも色々学ぶことができました。歯科医としては未熟ですが、この1年間の経験を無駄にせず、今後に活かしていきたいと考えています。そして、患者様の期待に応えることができる歯科医になりたいです。

最後に臨床研修でお世話になった先生方、看護師さん、衛生士さん、病院スタッフの方々、同期研修医の先生、本当にありがとうございました。



藤井先生の誕生日にて（筆者2列目左から2番目）

臨床研修終了にあたり

Bコース臨床研修歯科医 湯 浅 恵 伍

この度執筆を賜りました研修歯科医師の湯浅恵伍です。研修プログラムBで現在研修中です。プログラムBは、新潟大学の専門診療科と協力型研修施設で半年間ずつ研修するコースです。私の場合、4～9月は新潟労災病院の歯科口腔外科で、10月からは新潟大学の義歯診療科にて研修を積ませていただいております。

前半の研修先の新潟労災病院では、全身麻酔下および静脈麻酔下での手術やその助手、外来患者さんの口腔外科処置、周術期口腔管理、たまに一般的な歯科治療など様々な経験をさせていただきました。中でも、新潟労災病院では、歯科麻酔科医が常駐しているため手術室での麻酔下での手術が多く、智歯抜歯などの口腔外科処置を多く経験することができました。私は臨床実習では抜歯の症例がなく、一度も口腔外科処置の経験がない状態で研修が始まり、研修初期はなかなかうまくいかず悩む日々もありました。しかし、指導医の先生の丁寧なご指導に加え、日々の診療の中で、どのようにすると改善するのか、そのためには何が必要なのかを考えて次回の診療に臨むことで、着実にレベルアップできたように感じております。難抜歯や水平埋伏智歯抜歯を多く経験することができ、自信をもって患者さんに臨むことができる

ようになるとともに、診療に向けての事前準備や、手技の予習などの日々の研鑽が重要なのだと実感しました。

10月から大学病院に戻り、後半の義歯診療科での研修が始まりました。義歯診療科では義歯やクラウン・ブリッジによる補綴処置や、う蝕処置、根管治療などの保存修復処置を現在経験しております。大学に戻ってきて実感したこととして、自分で治療計画を立てるという経験の不足でした。前半の新潟労災病院では多くの抜歯などの口腔外科処置を経験できましたが、他院から紹介されて来た患者の治療を行い、治療が終わると紹介元の歯科医院に患者が帰っていくことがほとんどであった前半の研修とは異なり、後半の研修では補綴処置を行うために治療が必要な歯を診断し、治療の順番を決めるなど、その患者さんに合った全顎的な治療計画を立案した上で、様々な治療を行う必要があります。治療の計画立案は歯科医師人生として必須のスキルです。現在、確かな経験と知識を持った指導医の下で、様々なことを学びながらそのスキルを研鑽することのできる環境にあるため、残りの研修期間も多くの知識や技術を学び、研鑽に励みたいと思います。

最後になりますが、ご指導いただきました先生方、衛生士さんに感謝申し上げます。研修医として一年間学んだこと忘れず、今後も歯科医師として日々努力してゆきたいと思います。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

学生短期海外交流プログラム (SS・SV)

学生短期海外交流プログラム (SS・SV) の報告

歯学教育開発室 石 田 陽 子

新潟大学歯学部では、学生短期海外交流プログラム（通称SSSV：ショートステイ・ショートビジットプログラム）を行っております。

これまでの経緯と概要としては、以下のようになっています。

- ▶2011年度より開始
- ▶2020-2022年は新型コロナウイルスパンデミックのため渡航制限あり
- ▶2022年度3月期より一部SV再開、2023年度よりSS・SVともに本格的に再開いたしました。

【SV（本学学生を派遣するプログラム）】

派遣先は毎年変動しますが、今年度の見込みは以下となっております。今年度より、期間は16日間が標準となりました。

8月：インドネシア

3月：WHO本部、スウェーデン、アメリカ、カナダ、タイ、ベトナム、台湾

プログラム内容は現地教員に一任しますが、こちらからリクエストすることもあります。

英語圏の大学は学年制限（臨床実習生以上等）を設けているため、5年生以上が対象となります。低学年学生はアジアの学生と交流して英語力を伸ばし、高学年で英語圏のプログラムに参加することが望ましいと考えております。参加回数の制限はないため、過去には6年間で3回参加した学生もおります。

さて、実際に参加した学生の印象はというと

- ・異文化体験を十分にできた
- ・自分は低学年だが、歯科病院の見学をさせてもらえた
- ・高学年のみのプログラムでは、ハイレベルな歯科治療や、日本と違う教育カリキュラムを見ることができた
- ・地域歯科保健活動に参加し、学校や幼稚園を訪問できたのがよかった
- ・英語をもっと頑張ろうと思った
- ・英語も日本語も話せる現地学生がいて驚いた

帰国後は、多くの学生が「もう一度参加したい」と言って次年度に再応募してくれます。

海外経験がないのでチャレンジしたものの、異文化に慣れることができなかった、という学生もおります。日本の良さや改善すべき点を学んで帰ってきたのであれば、日本で根ざして頑張ろうという気持ちになり、それも一つのアウトカムだと考えております。

【SS（短期留学生受入プログラム）】

交流協定のある外国の大学歯学部から、8月と3月に短期受入プログラムを行っております。留学生は初日にオリエンテーションを行い、歯学部のほぼ全分野の教員から英語で講義・実習を受け、大学病院歯科部門、口腔外科手術室の見学をします。講義実習では学部生向けにわかりやすいトピックを盛り込んでいただいたり、また将来の大学院入学を見据えて現在進行形の研究について話していただいたりしています。また病院見学では、設備だけでなく、診療の流れやスタッフの動きが非常にシステムティックで、母国とは大きく違うと驚かれます。コロナ禍では本学学生との交流が難しかったのですが、感染症が落ち着いてい

る期間は学生交流を推奨し、プログラム中の放課後や休日などに食事や観光に出かけております。

2025年度も本プログラムを継続予定です。分野の先生方、どうぞご協力のほどお願い申し上げます。



GCデンタルオアシス訪問（2024年8月）



有志の留学生と佐渡旅行（2024年8月）



弥彦観光（2023年8月）



修了式（2024年3月）

複数のSV渡航で得たもの

歯学科5年 清水 香奈

私は昨年度の8月にインドネシア・アイルランガ大学のサマーコース、3月にスイス・WHO、スウェーデン・マルメ大学の留学プログラムに参加させていただきました。私は国際交流に興味があり、かねてよりSSSVに参加することが目標であり、夢でした。コロナも落ち着き、このような経験を年に2度もさせていただけたことに大変感謝しております。今回4回目の歯学部ニュースを書かせていただいておりますが、念願のテーマで書くことができ非常に光栄です。

アイルランガ大学のサマーコースには、私たち以外にも日本の他大学（東京医科歯科大学、大阪大学など）、イギリス、韓国、マレーシアの学生が参加し、共通言語である英語で交流を深めて文化の違い等を実際に肌で感じることができました。また、口唇口蓋裂手術見学、病理試験片製作や法歯学講義といったプログラムの数々は、当時4年生の私にとって何もかもが新鮮に映り、感動の連続でした。そして私が一番印象に残っているのは、アイルランガ大学歯学部の学生の前で日本のPublic Healthについて英語でプレゼンをしたことです。300人にも及ぶ学生が私たちのプレゼンに耳を傾け、プレゼン後は先生方も含めた白熱したディスカッションが行われました。日本のPublic Healthに興味津々な彼らからは質問の嵐でしたが、私自身の不十分な知識と英語力では明確に答えられない部分が多々あり、大変悔しい思いをしました。それ以来、普段の学習や英語力の習得に対するモチベーションを高く持ち、日々精

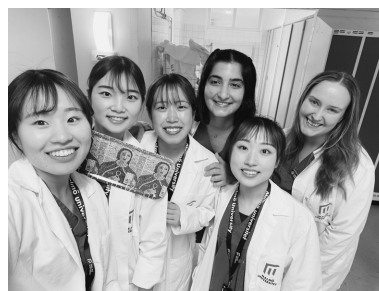
進しています。

WHO・マルメ大学の留学プログラムは、Public Healthに興味のある私にとって非常に充実した滞在でした。WHO本部のオフィス見学では、国や民族の違う人同士が何気ない会話からディスカッションまで英語でしている姿を実際に目にし、大変刺激を受けました。1人1人が輝いて見え、大きな憧れを抱きました。それだけでなく、私たちはオフィサーの方々と実際に言葉を交わし、WHOがどのような取り組みを行っているのかを知ることができました。マルメ大学では、主に学生の臨床実習を見学しました。新潟大学は4年生までに模型実習で技術や知識を会得したのちに5年生後期から臨床実習で実際の患者さんを診療しますが、マルメ大学では2年生から始まることを知り、驚きました。模型実習と患者さんの診療を並行して進めるカリキュラムとのことでした。スウェーデンは歯科医師に研修医制度がない上、学部教育が5年間であるため、限られた時間で早いうちから患者さんに触れる機会を増やすことが目的なようです。どちらのカリキュラムも一長一短があり、違いを目の当たりにして興味深かったです。そして私の憧れのヨーロッパの美しい街並みに囲まれた3週間の滞在は夢のようでした。

SSSVで得たものは貴重な経験だけではありません。多くの友人が海外にでき、今年タイ・バンコクで行われたAPDSA（アジア太平洋歯科学生会議）で再会したり、彼らが来日した際に日本を案内したりと、私の歯学生としての日常を豊かにさせてくれました。最後になりますが、小川先生や石田先生をはじめとする多くの先生方のおかげで私の今後の人生の大きな糧となる多くの経験を行うことができました。ありがとうございました。



インドネシア・アイルランガ大学でのプレゼンテーション（筆者一番左）



スウェーデン・マルメ大学でStudent Unionの学生と（筆者右から2番目）



憧れのWHOでくまのぬいぐるみと（筆者左から2番目）

WHO・マルメ大学でのSSSVを終えて

歯学科5年 平岡 望々

私は2024年3月に約4日間はスイス・ジュネーヴへ滞在し、世界保健機関（WHO）本部へ、約2週間はスウェーデン・マルメ大学でのSVプログラムに参加させていただきました。

WHOでは本部で活躍されているオフィサーの方々のお話を伺い、WHOの概要やコロナワクチンの状況、Oral Health、タバコと口腔健康に対するWHOの取り組み、UHC（Universal Health Coverage）についてのディスカッションを行いました。特に口腔保健についてはWHO Collaborating Centerである新潟大学との繋がりをを感じる場面もあり、印象的でした。また、国際機関で若い人が活躍する場を支援するJPO制度を通じて働かれている日本人オフィサーの方から、若手のうちからWHOでの勤務に挑戦できる機会があると聞き、非常に興味深かったです。他にはカフェテリアで先生方とランチをしたり、オフィス見学をしました。WHOの周辺はUN本部やUNICEFなどの建物がいくつも集積した国際機関関連都市ようになっており、胸が高鳴りました。

マルメ大学では主に講義やディスカッション、診療見学をしました。現地の学生は2年生後期からStudent Clinicで臨床実習を行っており、その早さと、各学年で1年間1つの診療科にて実習することに驚きました。早くから患者さんに関わるためか、最終学年（5年生）では急患対応もスムーズでとても慣れた様子だったので自分たちと差があるように感じたのを覚えています。患者さんもしっかり協力的で、う蝕を触ってみたり簡単なアシストをさせていただきました。先生方とは自国の歯科事情や医療福祉、歯学部のカリキュラムなどについてディスカッションし、歯科医師偏在の問題など日本と似ている話題もありましたが、やはり予防歯科への意識や制度など異なる点が

多く、驚きつつも非常に勉強になりました。

また、スイスではサンスター本社、スウェーデンではTePeへ訪問し、社内・工場見学や企業の歴史や取り組み、製品のレクチャーを受けました。ヨーロッパでは歯ブラシの先端がディスポーザブルで持ち手が繰り返し使用できるものや、持ち手が木製のものなどが人気で、日本よりもSDGsやサステナブルへの意識が高かったです。

今振り返ってみても上記の内容では全く書き足りないほど、毎日が貴重な経験ばかりで、プログラムの内容だけでなく食事や生活文化、価値観や国民性の違いにおいても学ぶことが多く、とても濃く充実したSVだったと実感しています。私は編入学した3年前の歯学部ニュースにも書かせていただいたのですが、医療行政に携わり保健医療の方向性を先導できるような歯科医師になりたいと思い編入しました。今回、世界最高の保健医療機関であるWHO、福祉国家・予防歯科先進国であるスウェーデンで多くの新たな知見を得られたことは私にとって非常に大きな刺激となり、自分の目標に向かって、改めて日々精進したいと思います。

最後になりましたが、日本からスイス、スウェーデンまで引率してくださった竹原先生をはじめ、WHOとマルメ大学訪問にあたりご支援くださった小川先生、石田先生、現地でお世話になった先生方に変感謝申し上げます。



WHOの前にて
（筆者右から2番目）



マルメ大学のボッセルトのオブジェとともに（筆者1番右）

SSSV報告

歯学科5年 宮田優奈

2024年3月に日本学生機構（SSSV）のプログラムに参加し、スイスのジュネーブに3日間、スウェーデンのマルメに13日間滞在しました。

スイスでは、WHOとサンスターに訪問しました。WHOでは仕事内容やオーラルヘルス、喫煙と歯科などについてお話を聞きました。WHOの内部について知ることができ、さまざまな国の人が交流して仕事をしているところを目の当たりにし、とても刺激的でした。サンスターではヨーロッパでの歯科市場についてお話を聞きました。企業が国民の口腔ケアに対してどんな商品開発がされているのか知ることができ、普段は医療従事者から患者に対しての視点でしか口腔ケアについて考えていませんでしたが、企業から利用者に対しての新しい視点で口腔ケアを考えるいい機会となりました。そしてヨーロッパでは、SDGsを取り入れることが国民の中で当たり前になっており、ヨーロッパと日本のSDGsに対する意識の差があると感じました。

スウェーデンではマルメ大学と歯科企業のTepelに訪問しました。マルメ大学ではスウェーデンの医療制度についての講義、臨床実習の見学をしました。スウェーデンの医療制度では、23歳までは医療費が無料であること、う蝕が日本よりも少ないことなど良い点があった反面、う蝕を経験せずに大人になったため近年歯ブラシの重要性を伝えきれていないことや、口腔ケアの知識は地

域によって差があるという問題点など、現地の人から話を聞くことでスウェーデンのリアルな部分を学ぶことができました。そしてマルメ大学の学生の積極性にとっても良い刺激をもらいました。Tepelに見学した時も現地の学生が企業の人と積極的にディスカッションをしていました。スウェーデンは年齢的な上下関係という概念がありません。話し相手がどんな人でも対等に話せる環境があることで自分の意見を発言しやすく親密な関係になりやすいのではないかと思います、日本とは違った良さがあると感じました。講義や臨床実習見学の後には、現地の学生とランチや夜ご飯を食べ、最終日にはみんなでミートボールを作るなど交流を深めることもできました。

今回のSVプログラムでは、大学で歯科のことを学んだだけでなく現地に足を運び実際に生活してみることで分かったこと、経験できたことが多くあり、とても有意義な時間を過ごすことができました。約3週間のプログラム、飛行機の欠航やロストバゲージなど多少のトラブルも起こりましたが、多くの人のサポートがありとても充実した毎日でした。どの経験においても共通していることは、どれだけ英語で自分の意見を伝えられるかだと思いました。とっさに伝えたい英語が出てこない時や、相手の言っていることを100%理解できなかった時は悔しい思いもしました。しかし、日本で過ごし、日本で海外のことを学ぶだけではわからなかったことをたくさん経験することができ自分の価値観を広げることができました。このような貴重な機会を作ってくださった先生方にはとても感謝しています。

WHO・マルメ大学SSSVに参加して

歯学科5年 石 塚 萌 絵

今年3月に、海外留学支援制度（SSSV）プログラムでスイスのジュネーブにある世界保健機関（WHO）本部ならびにスウェーデンのマルメ大学を訪問させていただきました。3月3日に日本を出発し、ジュネーブに4日間、マルメに14日間滞在しました。

WHO訪問では、WHOに勤務されている方から講義を受け、WHOの機能と役割、喫煙と健康について、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）について学びました。これまで歯科医療について世界規模で考える機会が少なかったため、世界では人種や文化を超えた支え合いが実現していることを知り、とても刺激を受けました。夕食はWHOで勤務されている日本人の方々とチーズフォンデュを食べました。本場のスイスチーズは想像を超える濃厚さで、あまりの美味しさに感動したことを覚えています。ジュネーブ訪問後は、飛行機でデンマークのコペンハーゲンへ渡り、マルメまで列車で向かいました。

マルメ大学訪問に際して、スウェーデンが歯科先進国であることが今回のSV参加理由の1つとして挙げられます。現地の歯科学生がどのような環境で学んでいるのか、更にはスウェーデンの国民が歯科医療に対してどのようなイメージを持っているか、自分の目で確かめたいという気持ちが強くありました。今回の訪問で、特に印象に残ったことが2つあります。1つ目は学習カリキュラムです。マルメ大学歯学部は5年制で、基礎科目

と臨床科目を並行して学習します。新潟大学では5年生の秋から臨床実習が始まりますが、マルメ大学は2年生の後期から臨床実習が始まります。座学や模型実習で習得した内容をすぐに臨床で実践することができる点は非常に良いと感じました。

2つ目は、スウェーデンの人々の予防意識の高さです。大学病院を受診する患者さんはみな協力的で、う蝕が少ない方が多く見受けられました。実際に話を伺うと、23歳まで医療費が無料であることで、幼少期から定期的に歯科を受診することが当たり前になっているそうです。また、家庭によっては土曜しか子供にお菓子を与えないと聞き、とても驚きました。スウェーデンと日本はどちらも高齢化社会であり、国民皆保険が存在するという共通点があります。しかしスウェーデンに広く普及している「治療するとお金がかかるから予防する」という考えは、「悪くなってから治療する」という考えが残っている日本と大きく異なると感じました。

約3週間の滞在は毎日刺激的で、自分の視野が広がったと感じました。また、ポリクリを控えた4年生の春休みに参加したため、臨床実習に対するモチベーションが高まりました。私は現在、臨床実習で終始緊張しながら患者さんと向き合っています。あの時見たマルメの学生を思い出しては、前向きに経験を積んでいこうと自分を奮い立たせています。

改めまして、貴重な機会をくださった小川先生、石田先生をはじめ、引率してくださった竹原先生、今回の派遣で携わってくださった全ての方々へ心より感謝申し上げます。

タマサート大学SV報告

歯学科2年 山田 珠詩

2024年3月10日から11日間、タマサート大学歯学部へ訪問する短期派遣(SV)プログラムに参加いたしました。タマサート大学歯学部はバンコクから北へ約40kmに位置するキャンパスにあり、大学病院が隣接しています。タイの気候はここ数年の新潟の酷暑と同じくらいでしたが、その後さらに暑い季節が来ると聞き驚きました。

タマサート大学では病院見学やいくつかの実習をさせていただきました。病院見学では5、6年生の臨床実習の様子を見学したほか、病棟でタイでの歯科医療の実態について学びました。臨床実習の制度など日本と似ている点がある一方で、歯科トラブルの原因に外傷が多いことやブース内に歯磨き練習用の大きな流しが設置されていることなど、日本と異なる部分も多くありました。

実習に関しては治療中の姿勢についての講義、フッ化物入りジェルの作成、口腔内スキャナーの操作など様々な体験をすることができました。特にハンドピースを使用し、練習用の実際の歯に対して切削や充填をする実習では臨床実習以前に本物の歯を削る感覚を体感できる貴重な機会となりました。

訪問中は主に歯学部2年生のバイリンガルコースの方々が付き添ってくださいました。一緒に昼食や夕食をとったり、ショッピングに行ったりし、勉強や課題などで忙しい中常に気を遣ってくれました。また、英語の堪能な2年生に囲まれたTBLの授業体験では、主体的にコミュニケーションをとるための英語力の必要性を痛感させられま

した。生徒の会話のスピードが早く、理解するのに精いっぱい自分の考えをうまく表現できない状況にもどかしさを感じました。

また今回、国際交流サークルの活動で昨年一緒に新潟観光をしたタマサート大学6年生の方々と再会することができました。訪問先にタマサート大学を選んだきっかけの一つが当時のその学生との交流で、大変印象に残っています。そんな方々と再び会えたことは嬉しく、SSSVに参加して良かったと思っています。現地では週末に時間を作って日帰り旅行を企画をさせていただいて、アユタヤを満喫することができました。

今回のプログラムではこのほかにも沢山の貴重な経験や出会いをさせていただきました。ここでの経験をきっかけに今後も広い視野を持って歯学や英語の勉強に努めていきたいと思っています。

最後になりましたが、今回の派遣でご支援いただいた石田先生、引率いただいた照沼先生、学内や現地でお世話になった方々に心より感謝申し上げます。



タマサート大学歯学部前にてSVメンバーと
(筆者は右端)

歯学部生の今

歯学部生の活動

歯学科1年 吉川陽向

新潟大学に入学してから半年以上が経ち、大学生活にも慣れてきました。入学当初は知らないことばかりで、新たな生活への期待よりも不安な気持ちが大きかったです。また、初めての一人暮らしということもあり、料理に洗濯など分からないことだらけでした。しかし、日々を過ごす中で新しい友人が少しずつ増えていき、勉強面だけでなく生活面においても助け合っていけるようになりました。そのおかげで、不安だった大学生活も少しずつ楽しくなっていく、今では日常生活も含め充実した毎日を過ごしております。

前期の授業では、「今のうちに沢山履修しておいた方がよい」という先輩方のアドバイスをいただき1年間で取得しなければならない単位の約8割を履修しました。また、前期は週に1度旭町キャンパスで行われる早期臨床実習・歯学スタディ・スキルズもあったため、自分が想像していた大学生活よりも忙しく感じました。特に早期臨床実習は実際に病院に赴くことが多く、ほとんどのことが初めてで不安や緊張でいっぱいでした。しかし、実際に治療している現場を見学したり、自分たちが患者役となって治療してもらったりするという貴重な経験を通して、自分がどんなことに興味があり、将来どんなことをしたいのかといったことを考える絶好の機会になりました。また、それが自分自身に歯学の知識が全くない状態

での臨床実習であったからこそ、患者さんの気持ちをより理解できたと考えます。1年生の間に体験し、学んだ経験を2年生以降の学びにも生かしていきたいと強く思いました。

また、大学生活は勉強だけではなく、部活動やサークルもとても充実しています。私は旭町水泳部と全学の水泳部に所属していますが、大学での部活動は中学や高校の時の部活動とはまた違った楽しみがたくさんあります。毎週の練習が楽しいのはもちろん、練習のあとの部飯、大会の後の打ち上げ、1年の中で季節に応じて開催される様々なレクリエーション等です。特に、夏に開催された浜コンは強く印象に残っています。浜コンでは、1年生から6年生までが学年関係なく海やバーベキューを楽しみ、より部員同士の絆が深まったと思います。

最後に、2年生になると1年生の時とは違い、学習内容はより専門的なものになっていくと聞きました。今は、これから多くの知識を本当に習得できるのか、そして実習等をしっかりとこなしていくことができるのかなどの不安な気持ちも多々あります。しかしその反面、自分のやりたかったことがようやくできるという高揚感が強くあります。これからの大学生活も、様々な方の支えの上に成り立っているということを忘れずに、何事にも全力で取り組んでいきたいと思います。まだ半年ではありますが、新潟大学での学びに大変満足しており、目標の歯科医師を目指して努力していきます。

歯学部生の今

歯学科1年 中 塚 莉 乃

4月に入学したのもつかの間、1年生として過ごす日々も折り返しを迎えました。地元を離れて始まった新生活にも慣れ、友人と顔を合わせたり、部活動に励んだりする日々充実感を覚えています。秋も足早に過ぎ去り、にわかに寒くなりましたがこの頃の天気は新潟の冬を感じさせますが、下がっていく気温とは裏腹に、私を取り囲む環境の温かさが身に染みんでいます。私個人としては4年ぶりに学生生活を送ることとなり、入学した当初は年の離れた同級生との接し方に悩むこともありましたが、夏休みには2泊3日で金沢へ旅行に行くほど親しい間柄にもなり、気さくに話しかけてくれた友人にはとても感謝しています。

さて、歯学部生の今ということで、後期の授業も始まって2ヶ月が経とうとしています。五十嵐キャンパスでは歯学と離れた授業が多く開講されており、自分の興味関心のある授業を受けることができる一方、毎週金曜日に旭町キャンパスで実習を行っていた前期に比べ、歯学部生と顔を合わせる機会が大幅に減ったように思います。学校生活では限られた友人と顔を合わせることがほとんどですが、幹事を中心に運動会の打ち上げや忘年会などを企画してくれており、学年全体の親睦が深まっていくのを肌で感じています。

私が所属している軽音楽部では、年に5回ほど古町のライブハウスを借りてバンド活動をしています。現在は1月のライブに向けて練習を重ねていますが、初めてギターを弾くことになり、ようやくバンドマンらしくなってきたなとワクワクすると同時に、焦りや心配にも苛まれている毎日

です。年齢を重ねるにつれて「初めて」がほとんどなくなったことに加え、チャレンジできる環境にいても失敗などの恐怖から新しい物事に組み込むことを避けるようになっていました。しかし、入部してから先輩方だけでなく同級生の演奏する姿を何度も目にし、私もやってみたいという気持ちが芽生えました。今回は先輩からの後押しもあり今日に至ったのですが、やはり何事も初めからうまくいくわけではなく、理想と現実のギャップに直面し業を煮やしています。久々の新しい挑戦には悩まされるものだなと参っていましたが、最近はこのもやもやが逆に楽しいのだと、日々の成長に面白みを感じています。

高校卒業以降、自分で選んだとはいえ周りの友人とは違う人生を歩む毎日で、鬱々とした気分になることも多くありましたが、コロナ禍を経て、多くの学生でにぎわうキャンパスで学生生活を送ることができる環境にとっても感謝しています。これから先の学生生活でも、壁にぶつかったり困難に直面したりすることが多くあると思いますが、自分の選択に責任と自信をもって日々過ごしていきたいです。



金沢旅行での1枚（筆者右端）

歯学部生の今

歯学科2年 藤岡 侑 剛

はやいものでもう歯学科2年の後期が始まりました。この大学に入学した日はおろか受験勉強をしていた頃も、ついこの前のことのように思い出されます。「歯学部生の今」というテーマでこの文章を書くにあたり、自分の今とこれまでの歩みを考える良い機会になりました。私にこのような機会をくださった編集部の皆様にここで感謝を述べさせていただきます。

歯学科2年生になり、歯科の専門知識やそれを学ぶための基礎的な知識を扱う科目が格段に増えました。前期は座学が中心で、高校の授業のような感覚でした。後期では実験や発表を行う科目が増え、より一層他の人とのコミュニケーションやスケジュール管理が重要になったと感じています。歯学科2年生は先輩方が口をそろえて勉強が忙しかった言う学年です。例にもれず私も試験勉強で四苦八苦しましたが、なんとか乗り切ることができました。試験勉強をする中で気が付いたのは、今まで学んだ知識がかなり生きるといことです。私は高校時代に生物と化学を学ぶのが純粋に楽しく、大学受験には必要ないような知識も多く覚えていました。そのため、生理学や生化学な

どでは、高校の生物や化学で得た知識を足掛かりにして知識を効率よく身につけることができました。医学研究について学ぶような科目では、1年生の頃に教養として受講していた統計学の知識が生きました。当時は将来の利益などを全く考えずに純粋な興味で努力したこと（伏線）が意図せず、そして、最初からそうなるように計画されていたかのように今の自分を助けてくれている（回収）。映画やドラマでよく見る「伏線回収」ようだなと思うことがあります。先日実家の自分の部屋を掃除していたら、私が小学6年生のころ授業で書いた10年後の自分あての手紙が出てきました。その手紙には、「歯科医師になるために歯学部に入っていますか？」と書いてありました。この時に私が感じた不思議な高揚感と感動は、映画の伏線が回収されたあの時の感覚に近いと今この文章を書いていて思います。私が経験した「伏線回収」は些細なものです。しかし、人生の歩みを進めるうちに自分が張った伏線が予期せぬところで回収され、より大きな影響を人生に与えることを予感しています。

伏線は今の自分の行動によって張られていくものです。まだまだ歯学部の学生生活は続きますが、学業もそれ以外も臆せず様々なことに挑戦し続けていきたいと思っています。



歯学部生の今

歯学科2年 長谷川 綾 音

2年生に進級して早くも前期が終わり後期に入りました。後期に入り、グループ学習や発表、実習など前期で学んだことを活かす講義が始まりました。今回は前期を振り返りたいと思います。

まず歯学部運動会についてです。私が所属する軟式テニス部は運動会の前座を務めることになり、Adoの『唱』のダンスを披露しました。着ぐるみを着て踊ることはとても恥ずかしかったですが、運動会を盛り上げるという前座としての役割を立派に果たすことができたのではないかと思います。そして前座で踊ったことにより恥ずかしさを捨て、怖いもの知らずの状態になったのでその後の競技を全力で楽しむことができました。また1年生の頃に比べ同期の仲が深まっていたので、今年はより盛り上がり楽しく参加することができました。

夏休みにはオールデンタルが開催されました。今年は仙台での開催で連日とても暑かったことを記憶しています。そのため試合後に食べたアイスは格別でした。去年はテストと大会が被ってしまったため初日しか参加することができませんでした。しかし、今回は団体戦、個人戦ともに参加することができ、悔しい思いも沢山しましたが他校の人と交流したりなどよい思い出を作ることができました。また引退された先輩方が応援に来てくださりうれしかったです。とても力になりました。

た。そして男子団体優勝、男子個人戦優勝、準優勝と去年見届けることができなかった先輩方や同期の活躍を見届けることができ、感動の瞬間に立ち会うことができて幸せでした。来年はよりよい成績を収めることができるように頑張りたいです。

そして2年生前期の最も大きな出来事といえば定期試験です。2年生から専門科目の学習が始まり、将来歯科医師となるための医学の基礎を勉強していることに楽しさを感じる一方、膨大な量を覚え、理解する必要があると焦りを感じました。私は大学受験では物理を選択していたため生物の知識がほとんどないに等しく、授業内容をちゃんと理解するのに苦労しました。しかし、周りの友人に助けられ授業内容を理解することができ、無事に試験を終えることができました。友人には本当に感謝しています。友達と勉強をすると勉強方法が十人十色で新しい発見をすることができ面白かったです。また、試験勉強を通して互いに協力して高め合う姿を見ることができモチベーション維持につながりました。

前期の大きなイベントを振り返ってみると、大変なことも多かったですが、周りの人と協力し乗り越えることができました。前期の大変さを乗り越えられたことでこれからもやっていけるという自信をつけることができたと思います。後期は実習や発表が多く、同期と協力する場面が多くあります。前期に私が周りの人に支えられたように今後は私も支えられるように頑張りたいと思います。

歯学部生の今

歯学科3年 西 脇 己太郎

歯学部に入学してから、すでに2年半が経過しました。最近、一週間が経つのが異常に早く感じます。講義の内容は基礎的なものから臨床的なものへと変わり、ようやく歯学部生らしくなったと感じる一方で、「あと3年で本当に歯科医師になれるのか」という焦りも感じています。今回は「歯学部生の今」というテーマで、現在取り組んでいる実習について書きたいと思います。

現在、歯冠修復学実習、歯形彫刻実習、歯の鑑別実習、そして病理学実習を行っています。歯冠修復学では、支台築造、全部金属冠の鑄造・合着、支台歯形成、TEC、個歯トレーの実習まで終わりました。この実習は映像コンテンツや実習書などの予習が多く、予習をしておかないと実習が全く進みません。予習をしてもできないことがあり、製作物のチェックシートが次々と溜まっていく状態です。しかし、この実習が一番楽しく、歯科医師としての勉強をしている実感が強いです。今後は、eポートフォリオを活用し、「どこがうまくいかなかったのか」「なぜできなかったのか」「できるようにするためには何をすべきか」を意識して取り組んでいきたいです。歯形彫刻実習では、上顎左側中切歯や上顎左側第一小臼歯のワックス彫刻、デジタルでの彫刻を行っています。自分の思った通りにワックスを削ったり盛ったりするのはとても難しいです。歯の形態的な特徴についての知識はあるものの、それをワックスに反映する技術が未熟なため、なかなか思い通りの形にすることができません。途中で投げ出したくなりますが、なんとか頑張っています。どちらの作業も実習時間内には終わらないので、ほ

とんどの作業を家で進めています。歯の鑑別実習では、実際の人の歯を使って鑑別を行っています。解剖学を学ぶ前は、歯の形は人それぞれ異なると思っていましたが、大きさは異なっても基本的な構造が共通していることに驚きました。中には摩耗している歯もあり、そういったものの鑑別は難しいですが、同期と知恵を出し合って取り組んでいます。病理学実習では、バーチャルスライドを使い、iPad上で異常組織像を観察しています。異常を理解するためには、正常な組織像の理解がいかに重要かを痛感しています。

どの実習も予習や課題が多く、さらにテスト勉強もしなければならないため、土日にも休む暇がありません。とても忙しい毎日ですが、2年後の臨床実習で最善の治療ができるように、今後の実習に励みたいと思います。



上顎左側中切歯のワックス彫刻

歯学部生の今

歯学科3年 富永彩愛

3年生の山場と言われる前期の人体解剖学実習を終えて後期になりました。歯冠修復学実習やカービング実習が始まり、本当の山場はこれからではないかと疑わずにはいられないほど多忙な日々を送っています。

まず初めに、歯学科58期の紹介をしたいと思います。58期は一言で言えば「真面目」な学年です。講義に来られる先生に「この学年はお利口さんだね」と言われたり、予習状況を確認した先生に「この学年は真面目だなあ」と呟かれたりしました。確かに、授業の予習は完璧にして、授業中も必死にメモをとっている友人が多いです。ですが、私たち自身に「真面目」という自覚はなく、周りが頑張っているから自分も頑張ろうというクラスの雰囲気を感じられます。また、どんな時も真面目なわけではなく、歯学部運動会では盛んに盛り上がり、総合優勝と看板最優秀賞を取りました。クラスの皆が団結した瞬間で、1番の思い出となりました。

後期から始まった実習でも、クラスの団結力を垣間見ることがあります。各教科で実習が始まりましたが、私はカービング実習で苦戦しています。カービング実習では、長方形のワックス棒から歯の形を形成していきます。それぞれの歯には特徴があり、全てを彫刻に表現することは非常に難しく何度もワックスを盛り直しては削ってを繰

り返しています。いち早く完成した友人はワックスを削るコツを教えてくれたり、放課後や休日と一緒に作業してくれます。友人に助けられ、私も不器用ながらも中切歯を削り終えました。支えてくれる友人に感謝する日々です。また、歯科補綴物を製作する冠ブリッジ実習も行っています。予習を前提とした授業構成のため、前日の放課後は友人と予習に励んでいます。先日は歯の石膏模型を製作しました。精密な歯の形を再現するためにいくつもの工程をクリアする必要があり、実習終盤は体力が限界に近づいていました。学校の実習で疲れて家に帰っても休めるわけではなく、次の日の予習をしたり実習時間内で終わらなかった作業を行ったりと多忙ながらも充実した日々を過ごしています。

3年生になってからは歯科の臨床的な内容の講義が増えたため、家族や学外の友人から歯についての相談を受けることが増えました。例えば歯間ブラシを使った方が良いのかや、歯の破折時にどうすれば良いかです。知識がついてきたとはいえ、実際に質問されると曖昧な部分が多かったり、一般の人にも分かりやすい用語で説明するのは非常に難しいと感じました。今後も学習を重ね、歯科医師になったときには完璧な説明をしたいと思います。余談ですが、飼い犬の歯についての相談は流石に分かりませんでした…。

気が付けば歯学部六年間の折り返し地点も迫ってきています。今後も多忙な日々が続きますが、友人と支え合い、自分を奮い立たせて頑張りたいと思います。

歯学部生の今

歯学科4年 山本 麻衣花

気づけば4年生も半年が過ぎてしまい、「歯学部6年間の折り返し地点が始まる!」と意気込んでいた4月がついこの間のように感じることに、時の流れの早さを感じます。

4年生前期からはより専門的な教科多くなりました。講義のスライドも実際の症例の写真を用いたものが増え、自分たちで症例検討をする授業も多く、臨床の現場に徐々に近づいているように感じます。講義の中では「国試では…」 「CBTでは…」という言葉聞く機会も多くなり、その言葉を聞いて即座にメモを取る同級生も増えたことで自然と私自身も焦りを感じているところです。実習については全部床義歯の製作を行いました。教科書や動画では一言で書かれている工程に、実習の中では何時間もかかってしまうことが多く苦戦しました。時間をかけて制作した義歯は自分の部屋に飾るほど思い入れの深いものになりました。

夏休みは部活動が主軸となった生活でした。4年生前期までの1年間は主将として、特にデンタル期間中に集団をまとめることの大変さを強く実感しました。私の所属する弓道部では、今年のデンタルは福岡県で開催されました。夏休み前半はデンタル強化練の毎日で、強化練中も部内戦など積極的に行い、技術向上だけでなく、部員間の親睦をより深められました。結果は悔しいものと

なってしまいましたが、自分の反省を見つけることができたように思います。デンタル後半では、観光をして私自身初めての九州地方を満喫することができました。デンタルが終了し無事新潟に帰還した際は、「1年なんとか主将の役割を果たすことができた」と安堵の気持ちが強かったことを覚えています。私自身は団体をまとめ上げることがとても苦手な性格なのですが、主将としての1年を通して周りを頼りながらではありますが、自分の新たな面を成長させることができました。

後期からは授業も実習の時間が多くを占めるようになり、より歯学部らしさを感じるようになりました。低学年だった頃は、白衣を着て大きな道具箱を持っている先輩方を見て、実習を待ち遠しく思っていたのですが、実際に取り組んでみると、楽しさを感じるよりも自分の無力さを痛感することばかりです。授業や予習で理解できたと思っても、実習になると思うように手を動かすことができません。自分の技量の無さを悔しく感じる一方で、自分の将来像を考えるきっかけとなり、理想となる歯科医師像を考えることで実習のモチベーションと保っています。

5年生に進級すれば、CBTやOSCE、臨床実習など、多くの壁が立ち向かっています。先生や先輩方からは、学年が上がっていくほど、一人ではなく友達と一緒に取り組むことが大切だ、という話をたくさんお聞きするので、クラス一丸となって、今後の学校生活を送ることができればと思います。

歯学部生の今

歯学科4年 賀 来 穂 高

こんにちは。歯学科4年の賀来穂高と申します。今回、「歯学部生の今」についての原稿依頼を頂きましたので、現在私が取り組んでいる日々の講義や実習、そして部活動（陸上競技）の二つの項目について書かせていただきたいと思います。

まず初めに、日々の講義や実習についてです。現在、歯学科4年生の時間割では1週間のうち4日間に実習がある形となっていて、その実習の多さからも5年生以降の臨床実習が徐々に近づいているということをひしひしと感じています。例えば、現在行っている実習のうちの一つである欠損補綴学IIでは、ブリッジの支台歯を形成したりTECを作製したりしています。3年時に行った実習の歯冠修復学の時に苦しんだのと同様に、周りの同級生と比べて形成するスピードが遅かったり、上手く形成できなかったりして焦ることもあります。しかし、歯学科に在籍していて将来歯科医師になろうと思っている以上はできなければいけないことです。よって、どの実習にも共通することですが、日々の実習の中で先生方にアドバイスをいただいたり、予習を行う中でどのようなことがポイントとなるのかといったことを把握してから実習に臨むことが大切であると感じています。また、講義や実習では臨床に直結することを多く学んでいるのですが、4年生になってからは

実際の患者さんの症例を見て、どのような症状がありどのような治療が必要かということを考える機会が多くなってきたと感じています。今まで学習してきた断片的な知識をうまく組み合わせながら考える必要があり、さらに多くのことを学ばなければいけないと感じています。5年生の夏にはCBTやOSCEが控えていたりするなど不安なことはありますが、その不安を打ち消すためにも今よりも積極的に学びを深めなければなりません。

次に、自身が部活動として行っている陸上競技について書かせていただきます。私は陸上競技を10年以上にわたって続けてきました。しかし、部活動として陸上競技を続けることができるのも後2年間と少ししかないと考えると少し寂しく感じると同時に残された期間でもっと努力しなければいけないとも思っています。私が所属している陸上競技部の周りの先輩や同期、後輩には陸上に対して真摯に取り組むお手本となるような人が多くいます。よって自分がそのような環境で陸上競技に取り組むことができていることは良い刺激にもなるため、4年生の夏を終えて引退した身ではあるものの可能な限り部活動に参加し続けるつもりです。一見シンプルに見える、走る、跳ぶ、投げるといった動作も実はとても奥が深く、どうしたらもっと上手く動けるようになるのかを考えながら練習する事が陸上競技の醍醐味でもあり面白さでもあると個人的には思います。陸上競技ができる残りの期間を楽しみつつも来年は今年よりも良い結果が得られる事を期待しています。



広島オールデンタルにて（筆者左から3人目）

意外と楽しい実習生活

歯学科5年 平野那知

初めまして。歯学科5年の平野那知です。今回初めて歯学部ニュースを書くことになり、嬉しさと緊張が相まった気持ちです。6年間で1回は書いてみたいなあと思っていました。せっかくなので楽しく書きたいと思います。

5年生の今はCBTとOSCEが終わり、11月には6年生からの臨床実習の引継ぎを終え、いよいよ1人での診療が始まります。わからないこと、できないことだらけで不安な気持ちもありますが、高校生の頃から憧れていた「歯医者さん」らしいことをついに自分がするのかと感慨深い気持ちでいっぱいです。

CBT、OSCEでは本試験で学年全員が一発合格することができました。夏頃は毎日のように図書館に通っていましたが、行くたびに同級生が勉強する姿を見かけ、団結感を感じました。なんとかCBTを終え、その2日後にはOSCEだったので7月の後半は怒涛の日々が続きました。後から振り返れば、意外と楽しい思い出です。

今は丁度6年生の先輩方から技工室の受け渡しが行われたばかりです。自分の机、冷蔵庫、電子レンジ、ケトルなど様々なものがあり、小学校の職員室のようなところで面白いです。早くも自分の机を好きなもので飾っている人もいて、個性が出ています。これから新潟の厳しい冬が始まりますが、技工室はいつも暖房でぽかぽかです。その代わりに乾燥がすごいので、わたしは近いうちに加湿器を持ってこようと思っています。

ここ最近は2つほど診療をさせていただきました。基本的な治療もひとつひとつが一大事のように

に感じ、顔が真っ赤になりながら診療しました。診療中はもちろん、事前の準備やミスをしてしまったときなど、周りの友人たちにとっても助けられました。また、臨床実習にあがってから、講義がなくなる代わりに先生に個別に指導していただく機会が増えました。分からないことを聞けばどの先生も時間をかけて丁寧に教えて下さり、とてもいい教育をさせてもらっていることを、恥ずかしながら初めて実感しています。そして、患者さんには来てもらうたびに長い間ユニットに座わって口を開けさせてしまい申し訳なさを感じるとともに、そんな中臨床実習に協力してもらえることに、とても感謝しています。

今までの模型実習は、クラウンブリッジ、部分床、全部床、歯内療法、歯型彫刻など色々ありましたがどれも「うわぁ次実習だ〜」といつも悲鳴をあげていました。ですが今は不思議と楽しく実習しています。これが初心になるのなら、結構良い初心を持てた気がします。まだまだ実習は長いですが、頑張っていこうと思います！



当院式の際にクラスの子と撮りました
筆者の位置：2列目1番右

歯学部生の今

口腔生命福祉学科1年 川 邊 樹実花

新潟大学歯学部に入學してから、早くも半年が経ちました。入學当初は、初めての一人暮らしや、新しい大学生活について不安を感じることもありましたが、今では優しい友達に恵まれ、そんな不安も忘れて充実した大学生活を送ることができています。

前期は、毎週金曜日に旭町キャンパスに通い、早期臨床実習や歯学スタディスキルズなどの講義を受けました。早期臨床実習では、治療の見学をしたり、患者役になって患者さんの立場で治療を体験したりしました。治療見学では、様々な診療科を回り、毎週新しい分野を知ることができました。病院の先生方は、歯科の知識がほぼない私たちに、専門的なことを分かりやすく説明してくださいました。歯科の知識をつけることができたと同時に、歯学部生としての自覚が芽生えました。

これを書いているのは、後期が始まって3週間ほど経った頃で、最近、新大祭がありました。学内には屋台が出店され、人も多くとても賑わっていました。ライブなども開催されていて楽しかったです。勉強については、今は歯学の授業はなく、教養科目の講義を受けています。入學したばかりの頃は早く専門科目を学びたいという思いがありましたが、教養科目を学ぶ中で、専門分野を学ぶのに必要な教養が自分にはまだ十分ではないと感じました。今では、教養科目が専門的な学びの重要な基盤になると考えています。特に、福祉学の講義では、福祉の様々な事柄を実務経験のある講師の方に教えていただき、具体的な事例や実践的な知識を学ぶことができ、自分にとってとても有意義な時間になっています。

五十嵐キャンパスに通うのも残り少なくなってきました。来年からは専門的な勉強が本格的に始まって忙しくなると思うので、今の毎日を大切に、勉学に励みながらも楽しく過ごしていきたいです。



2年生の今

口腔生命福祉学科2年 渡邊桃子

皆さまいつもお世話になっております。この度は歯学部ニュースの執筆の機会を頂いたので私の大学生活について紹介させていただきます。

今春から旭町キャンパスへ移動して半年が経ちました。口腔2年生の私たちは、後期から始まった相互実習と模型実習に日々励んでいます。相互実習を通して歯科衛生士の業務は口腔内の繊細な操作だけでなく、感染対策や滅菌作業などの衛生管理も大変重要であることを学びました。生命に関わる職業なので、患者さんに安心感を与えることができるように医療従事者としての意識を持って今後も実習に臨んでいきます。

実習では、頭で理解していても思うように手先を動かせず躓くことが多いです。そのような時でも先生方に「出来ていないこと」だけでなく、「出来ていること」も親身になってご教授していただけています。また、励まし合える友人や明るく頼もしい先輩方の存在が私にとって大きな心の支えになっています。不器用な私は実習で何度も失敗していますが、それでも挫折することなく向上心を持って頑張ることができるのは、近くで応援してくださっている方々のおかげであると思います。感謝の気持ちでいっぱいです。

私は勉学のほかに課外活動も大切にしています。私はダブルホームという、学生と教職員がチームになって地域課題に取り組む大学独自のプログラムに所属しています。メンバーは様々な学部にも属しているのでお互いの専門分野について話すことがよくあります。興味のなかった学問も話を聴く中で新たな面を知ることができ、その分野を学ぶ意義が分かったり面白さを感じたりと、視野を広げることができています。普段お世話になっている地域の方は、年長者や子どものような接点の少ない世代と交流をする機会が溢れています。特に年長者の方からは、同世代の人とはしないような昔の経験談や地域のことなど貴重なお話を伺うことができています。また活動全体から、地域の特色から得た知識、行事運営のやりがいやチーム活動の楽しさなど学んでよかったことがたくさんあります。ダブルホームで多様な人とつながる場ができたことで活動の度に新しい発見があり、とても充実しています。

このように、私は実習やダブルホームでの活動から他者とのつながりが自己成長のためにどれほど大切で、またどれほど温かいものであるかを実感するようになりました。これからも人とのつながりを大切に、そばで支えてくださる方々への感謝の気持ちを心に留めて日々を過ごしていきたいと思っています。



歯学部は今

口腔生命福祉学科3年 井 山 七 海

3年生の後期が始まり、残す学生生活は約1年半となりました。入学してから今日まであっという間に過ぎ、時の流れの速さに驚いています。2年生になってからコロナ対策が緩和され、全ての授業が対面となったことでクラスの友人とは毎日顔を合わせられるようになり、和気藹々と日々を楽しく過ごせています。今回、「歯学部は今」というテーマのもと、3年生になってからの日々と後期から始まった実習について執筆させていただきます。

3年生になってから歯科に加え、福祉の学習も始まり、複数科目同時進行のPBL、相互実習の総まとめ、福祉の現場実習など毎日1限から始まる日々で格段に忙しくなりました。1年生の頃、リモート授業が不満で「早く皆に会いたい」、「対面授業にしてほしい」、そう思っていました。今ではリモート授業が恋しいです。1限からの実習では集合が早いため、朝が弱い私にとってはとても憂鬱ではありますが、学校に行くと忙しいながらも友達との充実した楽しい学生生活が送れるので毎日頑張ろうという気持ちになれます。後期から臨床実習が始まり、今は2、3人ずつで各診療科を巡っています。実際に患者さんを相手に診療を行うことはとても不安ですが、病院で勤務されている歯科衛生士や歯科医師の方々、4年生の先輩方から沢山助けをいただきながらバキュームや器具・器材の準備など歯科衛生士としての業務を実際に行わせていただき、これまでの基礎実習や相互実習の学びをより深めることができています。診療内容によって使用する器具や器材が異なったり、患者さんによって診療方法を臨機応変

に工夫したりする必要があるため、まだまだ苦戦することが多いですが、回数を重ねるうちに大きくあった不安も少しずつ自信に変わっているように感じています。試行錯誤しながら歯科衛生士としての知識や技術を身に付けられるよう頑張っていきたいと思います。午前の臨床実習を終えると楽しいお昼ご飯タイムが待っています。友人と今日の実習の話やささいな世間話をして過ごすお昼の時間は楽しくて日々の活力になっています。

3年生になって大きく変わったことがあります。それは将来について考えるようになったことです。友人との会話に就職や結婚の話が出てくるようになり、もう21歳なのかと実感することが多くなってきました。皆それぞれ自分の目標があり、既に就職活動に向けて動き始めている人もいます。私は、今年の夏に地元の大学病院の口腔外科で実習をさせていただきました。病院での歯科衛生士の役割や雰囲気を知ることができたうえに、智歯の抜歯や往診での口腔ケアなどより近い距離で患者さんと関わることができました。歯科衛生士は1番近くで患者さんに寄り添え、コミュニケーションによって患者さんとの間に強い信頼関係を築くことができる素敵な職業だということに改めて実感しました。これまでの様々な講義や実習を通して自分の将来の方向性が定まってきたような気がします。

4年生からは本格的に病院実習が始まります。まだまだ力不足を痛感することが多い日々ですが、クラスの仲間と励まし合いながら1日1日を大切に過ごしていきたいです。これからの日々不安はありますが、一緒に悩みを相談し合える友人や親身に話を聞いてくださる先生方の存在がとても心強いです。恵まれた環境にいることに感謝しつつ、残りの学生生活を後悔しないよう充実したものにしていきたいと思っています。

歯学部デジタルデンティストリー

歯科医学教育におけるデジタルデンティストリーについて

生体歯科補綴学分野 長 澤 麻沙子

世の中のデジタル化に伴い歯科においてもデジタル化が進む中、歯科医学教育においてもどうしたらデジタル環境を有効に取り入れていくことができるかを考えることは重要です。

新潟大学歯学部はSimodont (Nissin, Japan) という、バーチャルリアリティ (VR) によって歯科技能をトレーニングできる機械を6台保有しています。これは実物を触らなくともその形や力を仮想空間の中で再現できる、いわゆる触覚デバイスと呼ばれるもので、実際の歯を削らなくとも視覚と触覚が連動して実物を削っているような訓練ができる機械です。この機械を保有しているのは日本では3大学のみで、中でも本学の保有台数は最多です。歯を安全かつ正確に削るための教育の多くを担当する当分野では、この本学の強みを生かすべく、これまでもこれを学生教育に導入してきました。早期臨床実習Ⅱにおいてはマネキンの人工歯（実物を削る）とSimodont（仮想空間で削り、実物は削らない）を用いて同じ歯種で支台歯形成を行い、その比較をする実習を行っています。また、クラウン・ブリッジ実習においてはさらなるトレーニングを希望する歯学生が使用しています。

ただし重要なことは、今後このようなデジタル技術を本格的に実習に取り入れて歯学生の技能を向上させるためには、どのようなデジタル機器をどのように使用するかを考えることです。本学はSimodontのみならず、DentSim (Image Navigation Ltd, USA) という機械も2台保有しています。これは実際の模型の歯を削る機械ですが、オーギュメントドリアリティ (AR)

の技術（ポケモンGOでおなじみになった、現実世界の空間に作り物を出現させる技術）を用いるものです。私たちはこれらをどのように用いれば支台歯形成能力が向上するかを先行研究として調べましたので、ここで簡単にご紹介いたします。

対象は歯学生（3年生）および研修医、グループは支台歯形成の練習を（1）VRマシンのみ6回（2）ARマシンのみ6回（3）VRマシン3回の後にARマシン3回（4）ARマシン3回の後にVRマシン3回（5）何もしない（対照群）、の5グループに分け、その練習の前と後を比較して、実物を削る支台歯形成能力が向上しているかを検証しました。その結果、歯学生ではVRマシンを3回練習してからARマシンを3回使用したグループの技能が一番向上したこと、VRマシンのみの練習は研修医に比べて歯学生の方が技能の向上がみられたこと、研修医はARマシンのみを使用した場合に一番技能が向上したことがわかりました。このことからデジタルマシンを用いることで支台歯形成能力が向上すること、対象者のレベルに応じて使用する機械の学習効果が異なる可能性が示唆されました。つまり、デジタルが従来の実物を使った方法に一方的に勝っているわけではなく、それぞれの対象者のステージに応じたデジタルマシンの一番効果的な使用法が異なる可能性があるのです。

オランダのVRマシン開発大学による討論会に長年参加されてきた魚島名誉教授のご功労で、今年の6月に世界でVRマシンを有する大学がその現状を発表するミーティングが開催され、私もそこで発表する機会をいただきました。本ミーティングはADEA（アメリカ歯科医学教育学会）やADEE（ヨーロッパ歯科医学教育学会）も協賛する広がりを見せています。このように世界の歯科医学教育では積極的にデジタルを取り入れている現状があり、VRやARマシンのみならず、AIを用いた教育の議論も始まっています。デジタル化

は限られた資源、時間、費用、医療安全、患者への倫理的問題等に対する対策としてのみならず、学生の自己学習を促す有用なツールである一方で、環境整備・維持のためのコストや教員の意識改革の問題もあります。この問題を学部全体で解決する必要があると考えるのは世界共通であることを本ミーティングに参加して実感しました。

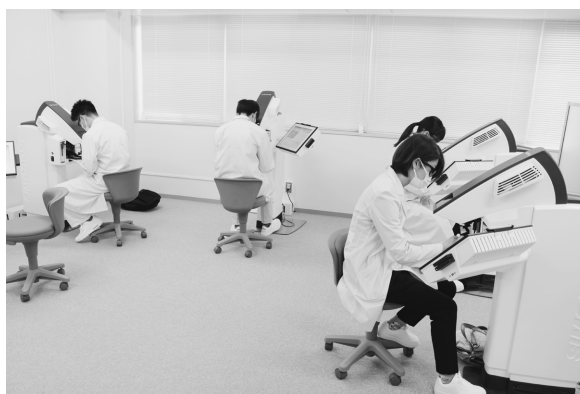
当分野の実習では口腔内スキャナやCAD/CAMも使用し、毎年改善をしています。学部全体においてもデジタルデンティストリーに特化した新たなカリキュラムの導入を考える必要があるかもしれません。今後、新潟大学歯学部ならではの歯科医学教育のデジタル化推進に期待が寄せられます。



VR技術を応用した歯科治療トレーニングシステムsimodont



simodontを用いた学生実習（１）



simodontを用いた学生実習（２）

ウェアラブル型咀嚼回数計を用いた咀嚼行動評価

包括歯科補綴学分野 堀 一 浩

食生活の変化によって咀嚼回数が減っていることが指摘されており、それに伴う「早食い」が肥満・糖尿病などの生活習慣病に与える影響が報告されています。「ゆっくりよく噛んで食事をしましょう」というフレーズをよく耳にします。しかし、実際に何回くらい咀嚼しているのか、自身ではよくわからずに、どのくらい噛むようにすればよいのか困ることが多いと思います。これは、日々の食事における食行動をモニタリングするツールが少なく、咀嚼行動に関する客観的なエビデンスが不足しているためと言えます。そこで、我々はシャープ株式会社が開発したbitescan[®]を使用して、日々の咀嚼行動を評価する研究を行っています。本装置は、右耳にかけただけで様々な項目の咀嚼行動をモニタリングすることができるウェアラブルデバイスです（図1）。スマートフォンと連携して、食事中的咀嚼回数やスピード、一口あたりの咀嚼回数や姿勢などを表示することができます。また、専用のアプリケー

ションでは、咀嚼行動を変容するために目標値などを示すこともできます。

本装置のテーマは、「噛むを測り、気づき、変える」です。我々は多数の対象者の咀嚼行動を測り、咀嚼回数とBMIには関連があり太っている人は噛む回数が少ない傾向にあることを明らかとしました。また、咀嚼行動変容アプリケーションを用いて1か月間のランダム化比較試験を行い、咀嚼行動変容効果を明らかとしました。さらに、新潟県内の小学校を対象に給食を食べる際の咀嚼行動を測定し、児童が自分の食べ方に気づいて、変えるための取り組みを行いその成果を発表しました。

本装置は簡便に測定できるので、よく噛むことを啓発するためのイベントでも用いることができます。本年11月3日に古町で行われた新潟大学創立75周年記念事業・新大祭～in 古町ルフル～にも出展し、約100名の方のおにぎり摂取時の咀嚼行動を測定してフィードバックを行いました（図2）。

我々は、本装置を用いて咀嚼行動を評価するとともに、よく噛むことが健康にどのように寄与することができるのか今後も検討を続けたいと考えます。

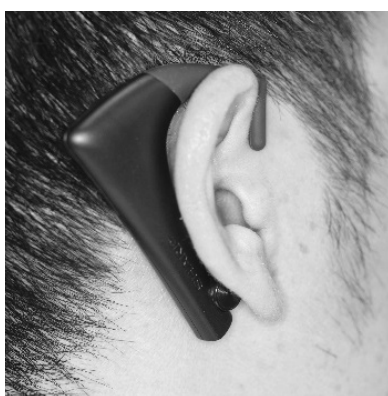


図1 bitescan[®]装着時写真



図2 bitescan[®]を用いた咀嚼行動啓発活動

モーションキャプチャ技術を歯科臨床教育に応用する

歯科総合診療科 佐藤 拓実

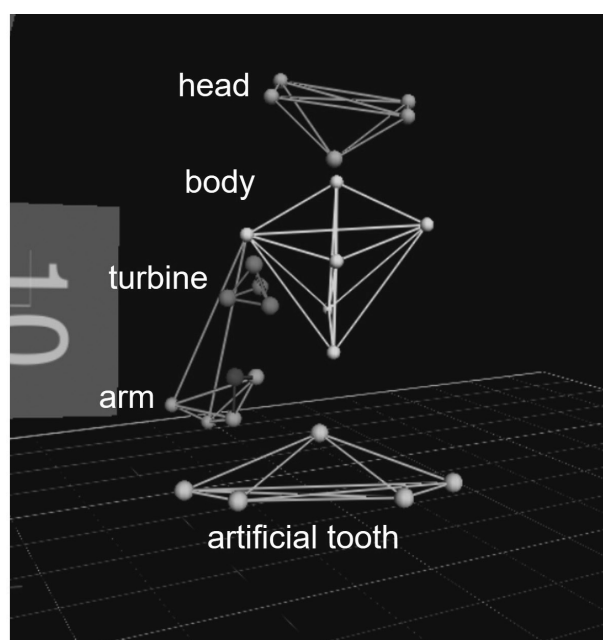
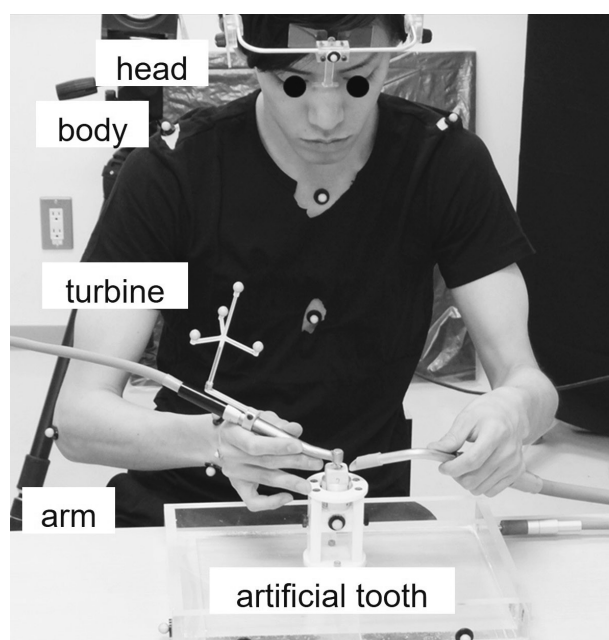
この度「歯学部デジタルデンティストリー」について依頼を受けましたので、これまで行ってきた研究内容を踏まえて紹介したいと思います。

デジタルデンティストリーは光学スキャンおよびCAD/CAMや3Dプリンタなど技工物の製作に大きく寄与してきました。これにより新たに必要となる技術や反対に重要性が低下する技術が出てきます。歯の切削は今後さらに重要となる技術と思われます。

私が研究に使用しているVICONという機器は赤外線反射マーカの位置を経時的に測定する、モーションキャプチャと呼ばれる技術を用います。現在は一般でも広く用いられており、歯科で

はインプラント治療においてX-Guideという3Dナビゲーションシステムとして実用化されています。私が工学部の今村研究室と行っている研究（共同研究の始まりは林研究室）はVICONを用いて歯の切削時の器具操作や身体動作を解析し、適切な治療操作の客観的指標を模索することで、これを歯科臨床教育に応用することを目的としています。

歯科治療を行う根拠や術式の指導あるいは結果を評価することは従前より行われてきましたが、治療の際の器具の持ち方や動かし方、あるいはそのコツなどは指導者の経験などに基づく主観的なものが多く、ICTがこれほど発展した現在において人間工学的な見地から歯科治療動作、手技を分析することで指導者の経験やスキルに強く依存せず、効率的な指導が可能となると考えます。今後研究を進めることで歯科医療に貢献できればと考えています。



実験風景（右）とプログラム上での反射マーカの3D画像（左）

歯学部デジタルデンティストリー

小児歯科学分野 中 島 努

デジタルデンティストリーについてお話しする前に、「口腔機能発達不全症」という用語をご存知でしょうか。これは、「食べる」、「話す」、「呼吸する」といった口に関連する機能の発達が不十分な子どもを指します。近年、コロナ禍におけるマスク生活の影響もあってかこの症状を持つ子どもが増加しており、小児歯科の分野で最も注目されている病態の一つです。

私たちの研究グループは、口腔機能の中でも特に「食べる」機能に焦点を当て、三次元運動解析から小児の口腔機能を客観的に評価する手法の確立を目指しています。この研究は医工連携のもと進められており、2014年度に歯学部を導入されたモーションキャプチャーシステム（VICON）を活用し、工学部の先生方と共同研究を行っています。特に、工学部福祉人間工学科の前教授である林豊彦先生からは、モーションキャプチャーシステムに必要なプログラミング技術を歯科研究に応用するための指導をいただき、小児の口腔機能に関連した三次元運動解析の知見を報告してきました。林先生の退官後は、工学部工学科の准教授である今村孝先生の研究室と共同で研究を進めてい

ます。この10年間デジタル技術の進展は著しく、動作計測の手法も大きな変革を迎えています。最近の今村先生との共同研究においては、小型の深度カメラ（Realsense™, Intel®）を用いて、顎運動などの口腔機能を計測する手法の確立が進んでいます。（図）この手法が確立されれば、従来はモーションキャプチャーなどの大型機器を備えた研究室でしか行えなかった動作計測が、場所を問わず実施可能となり、技術の臨床応用が実現する可能性があると考えています。生成AIやSNSなどのIT関連技術の革新が進む中、歯学部でも多くの側面でデジタル化の波が押し寄せており、この流れに乗って小児の口腔機能に関する研究を日々進め、多くの知見を提供できるよう努めていきたいと考えています。

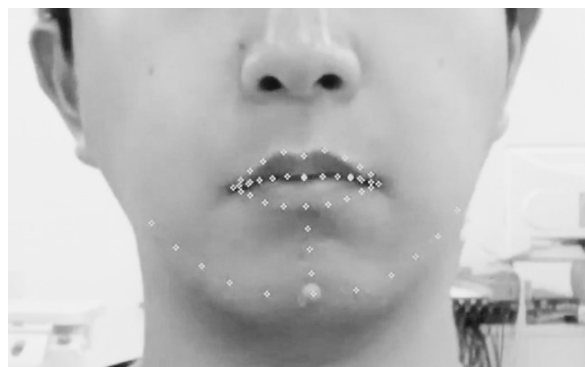


図 カメラから得た画像を処理し口唇、顔の特徴点を自動検出する技術

留学へ行こう

摂食嚥下リハビリテーション学分野 吉 原 翠

2023年4月より日本学術振興会の海外特別研究員として、Johns Hopkins Universityに留学する機会を頂きましたのでご報告いたします。Johns Hopkins Universityはアメリカ東海岸のメリーランド州ボルチモアに位置する私立大学で、医学・公衆衛生学の分野でよく知られています。Covid-19に関する報道で名前を目にした方も多いのではないのでしょうか。私は大学内の研究機関の一つであるasthma and allergy centerに所属し、Brendan Canning教授の教室で研究に従事しています。Canning研究室は咳反射のメカニズム解明を主なテーマとしており、最近では気管から放出される咳関連メディエーターや、咳と神経学的に関わりの深い嚥下機能の生理学的研究を行っています。留学前に嚥下の研究をしていたこともあり、現在私は食道刺激誘発性嚥下と食道から放出されるメディエーターの一つであるATPの関連に着目し、in vivoおよびex vivoの実験をしています。留学当初は教授とのコミュニケーションにも苦労しましたが、生活・研究ともに奮闘しながら充実した日々を過ごしています。

現在、同センターに在籍する日本人は私一人ですが、Johns Hopkinsの他キャンパスや隣接するNIH（アメリカ国立衛生研究所）には日本人も多く在籍しています。渡米して得られた経験の一つは新潟では出会えなかった人と親しくなれることでした。圧倒的なマイノリティであるという共通点のもとに日本人同士、また、アジア人同士で連帯しやすいのです。日本ではあまり起きないあ

らゆる面倒事（事務手続きから犯罪まで）を、「This is America.」と笑い飛ばす先達の様子にはいつも勇気づけられます。日本を離れ、自分自身の見識を広げる機会を得られたことは私にとってこれ以上ないほどの幸運です。留学先で得た経験をもとに、歯科医師として臨床に還元できる研究を行えるよう、今後も精進していく所存です。最後になりますが、このような貴重な機会をくださった井上誠教授および辻村恭憲先生に心より感謝申し上げます。また、留学に際し多大なご迷惑をおかけしているにもかかわらず、温かい励ましとご支援をくださっている真柄仁先生、伊藤加代子先生、小貫和佳奈先生、笹杏奈先生をはじめ医局の皆様にも、この場を借りて深く御礼申し上げます。



asthma and allergy centerにてラボメンバーと
左：Brendan Canning教授、中央：筆者

アフリカ 3 か国の保健省からの 研修生の受け入れについて

令和 6 年 7 月 30 日（火）から 8 月 7 日（水）まで、令和 6 年度 医療技術等国際展開推進事業「ケニア、ザンビア、タンザニアにおける WHO 必須歯科材料を用いた口腔疾患の予防・治療技術の能力強化事業」が行われました。新潟大学歯学部（WHO 口腔保健協力センター）は、共同研究機関である国立国際医療研究センターとともに 3 か国の保健省から各 2 名（歯科医官、薬剤官を 1 名ずつ）を新潟大学に招聘して研修プログラムを実施しました。



フィリピン・マニラセントラル大学の 表敬訪問について

新潟大学歯学部では、グローバル社会の実現に向けた国際ネットワークの構築を進める中で、教員の学術交流、大学院・学部学生の交換留学に努めています。

このたび令和 6 年 9 月 20 日（金）に、新潟大学歯学部とフィリピン・セントラルマニラ大学歯学部との部局間交流協定更新の調印式参加のために、Ma. Cristina Aurea G. Garcia 歯学部長に加えて、Renato C. Tanchoco, Jr 学長、Maria Lilybeth R. Tanchoco 医学部長が本学歯学部、医学部、本部を表敬訪問されました。両学部は、1997 年に部局間交流協定を締結しました。その後、短期留学制度を利用した学部学生、国費留学生（大学院生）、JST さくらサイエンスプログラ



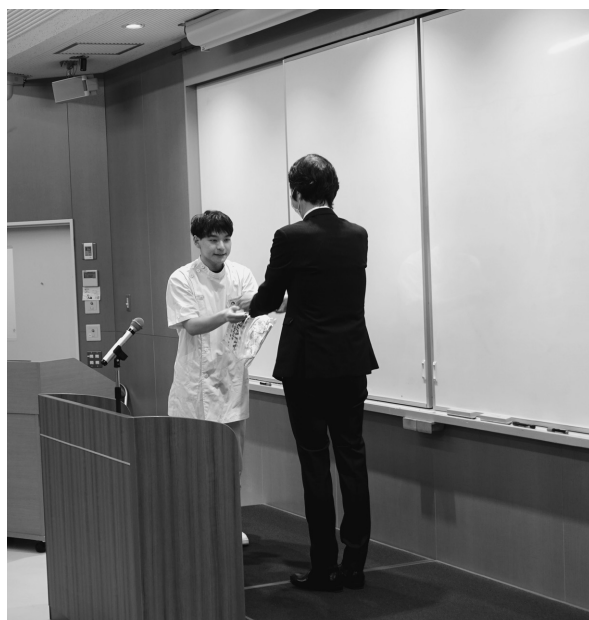
ムによる若手歯科医師の受け入れを始めとして、これまで多くの人材育成に貢献してきました。引き続きフィリピン等の東南アジア地域における超高齢社会の到達を見据えた歯科医療、口腔保健分

野での人材育成への貢献や共同研究の展開が期待されています。

令和6年度臨床実習生（歯学）認定証授与式 および臨床実習登院式の実施について

令和6年10月15日（火）に、臨床実習生（歯学）認定証授与式を行いました。本認定証は、今年度から公的化された臨床実習を開始する前の共用試験（CBT及びOSCE）に合格し、本学が定めた必修単位のすべてを取得することによって診療参加型臨床実習に進むために必要な知識及び技能を有していることが認められた歯学生に授与されます。今年度は歯学科5年次の学生38名が臨床実習生に認定されました。授与式では、井上誠歯学部長から訓示があり、「入学後に身に着けた知

識・技術をもとに、自信を持って臨床実習に望んでください」と学生たちに期待の言葉が送られました。その後、代表学生からは、「感謝の気持ちを忘れず、より多くのことを学び経験することで実りある臨床実習にすることを誓います」と決意が宣誓され、井上学部長から代表学生に臨床実習生（歯学）認定証及びネーム刺繍の入った診療衣が授与されました。また授与式に引き続いて臨床実習登院式が行われました。



教授人事について

令和6年3月末で退職された齋藤功先生（歯科矯正学分野）の後任として、令和6年11月1日（金）に同分野の丹原惇先生が昇任されました。

女性歯科医師を囲む座談会について

令和6年度ジェンダーダイバーシティ部局応援プロジェクトの採択を受けて、11月3日（日）に、新潟大学歯学部を卒業して現在も活躍されている4名の歯科医師（新潟大学医歯学総合病院 金丸博子先生、五泉市開業 石井多恵子先生、新潟県庁勤務 林悠子先生、大学院生 相澤知里先生）を

招いて、在学中の学生さんとの座談会を開催しました。先生方からは、自らの経験を踏まえて、卒後のキャリアアップや結婚・出産を経てどのようにワークライフバランスを保ちながら歯科医師、行政職として働いているかについて語っていただきました。



2024年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」について

今年度歯学部から申請していた標記プログラム「生涯の「食べる」を支える口腔医療コンダクター養成プログラム」（対象国南西アジア）が採択されました。

令和7年度学長裁量ポイント（スイングバイプログラム）について

歯学系への配分予定であった統合口腔感覚免疫学分野、摂食行動制御工学分野、オミックス組織再生学分野から、それぞれ田村光先生、筒井雄平先生、小野喜樹先生の採用が認められました。

バレーボール部

歯学科4年 久田 峻也

皆さんこんにちは！バレー部主将を務めております久田峻也です。

現在バレーボール部は、男子部6名、女子部14名の計20名で活動しています。これを読んで私たち歯学部バレーボール部の活動や魅力を知っていただきたいです。

私たちは、毎週月曜日、水曜日、土曜日、日曜日に旭町第2体育館で活動しており、夏のオールデンタルや、春と秋に開催される新潟市民戦に向けて日々練習に励んでいます。部員には、経験者や大学からバレーボールを始めた人など数多くいますが、皆で和気藹々とバレーボールをしながらも、大会が近づいてくると練習にも段々と熱が入り始めます。互いのいいプレーは褒め合い、時には部員間でアドバイスをしあったりなど楽しく部活に励んでいます。大学から始めた部員も入学から半年経った今、サーブは勿論のこと、男子バレーボールのネットの高さは243cmと高いですが、スパイクも“ナイスキー”と叫んでしまうほどいいスパイクを打てるように成長しています。バレーボールはチームプレーなので、個人の技術の向上よりもチームとしての平均値を高くすることを目標に、声を掛け合いながら日々練習しています。

部活は、バレーボールをするだけじゃありません。1年を通して同じ部活の仲間たちと様々な行事を企画しています。春には新入生歓迎会、夏には浜コン、冬には忘年会や追いコンなどがあります。浜コンでは、朝に買い出しに行き各々好きなものを買った後に、浜でBBQをします。勿論み

んな水着を着てきて海で泳いだり、浜でビーチバレーをして遊んだり、夜には花火をして仲間との大切な思い出を作ります。

でもやはり、1番の思い出はオールデンタルです。全国の歯学部生が一カ所に集まり、バレーボールで戦います。男女ともにレベルが高い試合が多く、より良い試合をするためにここに向けて練習した成果を発揮するために、全力で試合に臨みます。オールデンタルは試合だけではなくありません。部活の仲間たちと飲み会をしたり観光したりすることも醍醐味の1つです。毎年会場が変わるので、試合の間やデンタルが終わった後に、その場所の名所をまわったり、名物を食べたりします。

最後に、こうして我々が部活動に励むことができるのも支えてくださるたくさんの方々のおかげです。これからもご支援のほどよろしくお願い致します。



オールデンタル広島での集合写真

歯学部軟式野球部の今

歯学科4年 岡 本 啓

私が入学してもうすぐまるまる4年、こんなに充実した大学生活を送ることができている根幹には部活動の存在が大きいです。私は野球部と軽音部に所属していますが、今回は野球部について話していこうと思います。

歯学部軟式野球部には現在、部員14名、マネージャー5名ほどが在籍しており、活動は月曜、金曜に16:40から新潟大学附属小学校の校庭をお借りして練習をしています。野球をするということに関して、決してものすごく環境の良いグラウンドというわけではありませんが、それでも4年も練習していると愛着と高揚感、たまに懐かしさが込み上げてくるのは不思議なものです。

さて、野球部には現在特筆すべき問題があります。それはチームの高齢化です。驚くべきことに私が入部してからの4年間レギュラーがほとんど変わっていません。それはつまり、6年生にまだ最前線で戦っていただいているということであり、後輩の育成ができていないということです。というより後輩がほとんどいないのです。部員14名と先述いたしましたが、6年生4名、5年生3名、4年生5名、3年生2名、以上です。ベースを駆ける時、キャッチャーで立ち上がる時、外野に飛んだ白球を追いかける時、チーム全体として年々重く、遅くなっているのは言うまでもありま

せん。この消えかかった灯火を吹き返すような1年生が来年入部してくることを切に願っています。

また、今年、歯学部軟式野球部として初めてオールデンタル（全日本歯科学生体育大会）に準硬式野球部門で参加することができました。デンタルの参加に向けては様々な方が援助、協力してくださったため、まずはこの場で心より御礼申し上げます。8月中旬長崎で行われたデンタルは最高気温38度の酷暑の中、数年ぶり、人によっては十数年ぶりに白球だけを追いかけた青春の詰まった期間でした。結果としては徳島大学さん、大阪大学さんとともに惜敗し、全国の歯学部野球部のレベルの高さに驚かされましたが、軟式ボールから準硬式ボールに変えて練習を始めて4ヶ月、できるだけ努力と練習をすることができたと思います。夜12時に集まってみんなで素振り、体を強くするための食事トレーニング、ユニフォームがどろどろになるまでの守備練習、デンタルの大会開催期間もさることながら、その練習期間もかけがえのない、輝く思い出となりました。

最後になりますが、歯学部野球部を支援してくださる全ての方々に感謝申し上げますとともに、今後とも応援していただければ幸いです。



6年生バッテリー



まだ動ける二遊間



楽しむ時は全力で

早期臨床実習を終えて

歯学科1年 濱 航 太

約7ヶ月前、これから始まる大学生活に胸を膨らませながら入学式を迎えました。それからあっという間に時は過ぎ、一年生の後半が始まりました。一年生の間は五十嵐キャンパスで歯学の基礎となる数学や物理といった科目や、様々な外国語そして新潟大学ならではの講義をメインに学習します。そして、一年次では唯一である歯科について学ぶ科目が早期臨床実習です。

早期臨床実習では歯周病科や矯正歯科などの診療科の先生からどのようなことをしているのかを聞き、実際に治療しているところを見学しました。また、六年年生の先輩に患者として歯を診ていただく患者役実習があります。この早期臨床実習で様々な発見や学びがありましたが、そのなかでもある二つのことが特に私の成長につながりました。

一つ目は治療見学によるモチベーションの向上です。早期臨床実習を受けるまでは治療についての具体的な仕事内容は知りませんでしたが、この講義を受けて将来私が歯科医師としてももちろんすべてではありませんが、どう治療していくのかイメージを持つことができました。そして、このイメージが今後の学びのモチベーションになりました。

二つ目は患者さんの視点に立つことがとても大事であることです。患者役実習で治療を受けましたが、どのような治療をしているのかは患者視点からだとわかりませんし、痛みや滲みは逆に患者にしかわかりません。だからこそ歯科医師の視点だけでなく患者さんの視点に立つことも非常に大切であると身をもって学びました。

早期臨床実習を通して、自分は医療に関わる仕事に就くという意識が高まりましたが、この実習のために時間を割いてくださった先生方、治療見学にご協力いただいた患者さんそして治療してく

ださった先輩方には感謝の言葉しかありません。新しく出会った仲間達と共に、この実習で学んだことをいかして学業に励んでいきたいと思います。

歯学科3年 吉 田 百 花

私たち3年生は早期臨床実習Ⅱで初めて病院に出ました。この授業は、基礎系科目の先生方による講義と、病院見学、実習班ごとのグループ学習の3部構成で行われました。

各基礎系科目の講義では、顎顔面・口腔機能や生命科学現象などについて学習する普段の講義とは異なり、歯科疾患や治療法、治療薬など臨床との結びつきについて解説していただきました。さらに国家試験でどのような問題として出るか、日常生活においてどのように活用されるかについてなど歯科分野を超えて私たちの生活に深い関わりがあることを理解することができました。

病院見学では、患者さんの実際の診察や治療の場面の見学だけでなく、印象材やワイヤー曲げの実習も行いました。私は口腔外科を見学した際に基礎系科目との強い関わりについて理解することができました。症例とその治療方法や使用した薬剤、副作用、多職種連携について細かく具体的に例を挙げて説明してくださったので、歯科薬理学や口腔組織発生学、解剖学など様々な分野の基礎系科目の知識が必要であることがわかりました。

グループ学習では、講義と見学を通して得た知識を自分たちなりに考え直し発表したことで理解がより深まりました。

早期臨床実習Ⅱを通して学んだことは、基礎系科目と臨床との結びつきの強さです。2年生までは基礎系学科科目の学習が主であり、試験をこなすことで精一杯だったので臨床との結びつきについて考える機会があまりありませんでした。実際

に見学をしたことで臨床の現場ではそれぞれの科目で学んだ知識を治療に結びつけるだけでなく、各科目同士の知識の結びつきまでも理解して初めて使える知識になるということを深く理解することができました。今後の授業では実習が増えていくため、基礎系科目の知識を思い出しながら実習に励みます。

口腔生命福祉学科1年 高橋 美 優

私は今まで、学科名である「口腔生命福祉学科」になぜ「生命」が入っているのかを理解していませんでした。しかし早期臨床実習において様々な診療科の先生方から話を聞き、理解することができました。私たちが生きていくためには、栄養を摂取しなければなりません。食べ物を口に入れ、筋肉を使って顎を動かし、舌と歯を使って噛み砕き、筋肉を使って飲み込みます。この咀嚼・嚥下機能が衰えたのなら、食材をペースト状にしたものを食べれば良いのではという発想をしていましたが、一般的に食材は手を加えない方が栄養価が高いということを教わりました。口腔機能は栄養価の高い状態で食べ物を摂取するためにとっても重要な役割を担っているのです。したがって口腔機能は生命と密接に関わっています。

早期臨床実習の中には車椅子実習もありました。車椅子実習を通し、歩行が困難な患者さんが診療所に来た場合の診療は想像がつかしました。しかし目が見えない患者さんや耳が聞こえない患者さんに対してはどのように診療するのか想像がつかません。車椅子実習は私の視野を広げてくれたと思います。医療は全ての人に受ける権利があり、全ての人に均質に医療を提供する上で、医療と福祉は切っても切れない関係にあると思います。そしてこの学科が「歯科衛生学科」ではなく「口腔生命福祉学科」であることの利点を最大限に活かし学ぶ必要があると思います。

早期臨床実習を終え、「口腔生命福祉学科」に込められた意味を認識することができました。早期臨床実習を終えた今の気持ちを忘れずに3年間

勉学に励み、口腔生命福祉学科が理想とする人材となって卒業できるよう精進してまいります。先生方、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

口腔生命福祉学科2年 阿部 愛 未

早期臨床実習ⅡBでは実際に保健・医療・福祉の現場へ訪れたり教科書や講義だけでは得られない多くの学びを得ることができました。

前半の授業では主に施設見学をさせていただきました。特に印象に残っているのは1.6歳児検診・3歳児検診と児童相談所です。

1.6歳児検診・3歳児検診での歯科衛生士の業務は診療補助だけにとどまらず、食事やおやつ摂取状況、ブラッシングの習慣など細かいところまで確認するということが分かりました。また、私がつかせていただいたお母さんは初めての育児かつ頼れる人がいない状況のため、戸惑いや不安を抱えていました。しかし、歯科衛生士の方がその心に寄り添い、専門的な知識を活かして丁寧にサポートする姿が印象に残りました。

児童相談所ではさまざまな背景を持つ子どもたちが過ごす施設の現状を知る貴重な機会を得ました。私は最初、児童相談所や保護所には暗いイメージを持っていましたが、そこにいる子どもたちがとても明るく過ごしている姿を見て、そのイメージが大きく覆されました。それは、職員の方々が子ども一人一人に真摯に向き合い、子どもたちが安心して過ごせる環境づくりをしているおかげだと分かりました。歯科衛生士・社会福祉士としてどのように子どもたちを支えていけるのか考えさせられました。

後半の授業では、バイタルサイン測定や救急蘇生法、感染予防対策など今後実習を行なっていく上で重要なことを学びました。

この授業を通して歯科衛生士・社会福祉士として技術や知識だけでなく、患者や利用者の方の気持ちに寄り添う大切さを学ぶことができました。今回得たことを忘れず、今後も学びを深めながら成長していきたいと思います。

ポリクリを終えて

歯学科5年 市川 華帆

大学5年、ポリクリが始まりました。4年間の臨床歯学の学習を活かし、知識、技術の統合の為、班員7名で、11科を回りました。

ポリクリ以前は決められた治療を学び、それを模型で行うといった実習でしたが、ポリクリが始まり、対“人”を経験しました。

私達5年生は、1年生の時からコロナ禍であり、班員のマスク下の顔もあまり見ない中、口腔内と向き合いました。濡れ感のあるピンク色、その中に白い歯。プライベート空間を覗き見しているような気持ちになり、震えながらミラーを入れ、あたふたしました。

その後、様々な実習を相互で行いました。患者さん側も経験することにより、手技の違いによって受ける印象の違いを学びました。治療を行うために必要な事と患者さんの痛み、不快感との兼ね合いを考え、それに伴った声掛けの仕方や必要性も学びました。班員は個々人特徴があり、嘔吐反射や知覚過敏とそれぞれに対応が必要で、心理や社会的側面なども含めると想像以上のケースパターンがあることを知りました。

現在は臨床実習が始まり、実際に患者さんを担

当させて頂いているのですが、ポリクリのお陰で、口腔内の抵抗は一切なく、一人一人の患者さんと向き合うことができています。これからも様々な事を学び吸収して成長していきたいと思います。

歯学部5年 土谷 瞭斗

3年生の頃、廊下ですれ違った2個上の先輩方が緑衣を着ていたのを見て、きっと非常に大変な実習をしているのだろうなと思っていました。そんな僕たちもあっというまに5年生になり、緑衣を着る学年になりました。5年生になり半年が経過しましたが、思い返してみるとCBT・OSCEの勉強を頑張りながらも、常に焦燥感に駆られていた日々でした。そんな半年で最も多くの時間費やした授業がポリクリでした。ポリクリは簡単に言ってしまうと臨床実習の前に行う予備実習で、様々な課題を行います。ポリクリが他の実習と一番異なる所は、生徒同士の相互実習があることだと思います。今まで行ったどの実習も相手はマネキンでしたが、ポリクリでは人を相手にして実習を行います。実際に人を相手にした実習は非常に緊張するもので、初めて麻酔を打つ時は注射器を持つ前から手が震えていたのを覚えています。しかし、そういった相互実習を経て様々な事を学びました。頬を圧排する時の痛くない力加減、印象を取る時に生じる危険性、患者が苦しまないチェア角度など、実際の臨床では必ず意識しなければならないことを多く学ぶと共に、今までの実習では意識できていないことを実感しました。正直、ポリクリの内容をガイドブックで読んだとき、CBTの勉強だけでも大変なのに勘弁してくれと思いました。しかし、ポリクリで学んだ内容は後の臨床実習は勿論、CBTやOSCEにも関係する知識であると同時に歯科医師となるには必要



“ポリクリ班の班員と”
筆者前列中央

不可欠な事を学ばさせていただきました。今はまだ臨床実習が始まったばかりで、勉強すればするほど分からないことが出てくる毎日ですが、ポリ

クリで学んだことを最大限に活用して、臨床実習を行っていきたいと思います。



学会受賞報告

第35回日本臨床口腔病理学会総会・学術集会 優秀ポスター賞

受賞報告

組織再建口腔外科学分野 羽 賀 健 太

この度、第35回日本臨床口腔病理学会総会・学術集会 優秀ポスター賞受賞報告にて、優秀ポスター賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。演題名は「3次元培養技術を用いた口腔がん微小環境モデルの構築」です。

本研究は口腔がん患者由来のがん関連線維芽細胞（CAFs）の分離培養を行い、口腔がん細胞とCAFsを用いた3次元培養モデルを確立し、がん微小環境における浸潤能機序への影響について検討を行いました。

その結果、CAFsの存在ががん細胞の浸潤を促

進することから、口腔がん細胞とCAFsの相互作用は癌の浸潤に重要な役割を果たし、本モデルによりがん浸潤能を評価ができることは、がん研究における新たな研究ツールの1つとしての応用が期待されます。

最後になりましたが、ご指導いただきました口腔病理学分野田沼順一教授、生体組織再生工学分野泉健次教授をはじめとする研究を進めるにあたり御支援を頂きました先生方に心から厚く御礼申し上げます。



学会会場での集合写真。筆者は左から3番目

Report of academic conference award

Division of Bio-Prosthodontics Quang Nguyen Van

I am deeply honored to have received the Oral Presentation Award at the 133rd Annual Meeting of the Japanese Prosthodontics Society for my presentation titled “Controlling redox state at the transplantation site enhances bone regeneration”. My research addresses a critical challenge of bone augmentation procedure.

In cell-based bone augmentation, excessive reactive oxygen species (ROS) generated at the surgical site often cause local oxidative stress, compromising the survival and function of transplanted cells and hindering bone regeneration. By locally ad-

ministering EDA at the transplantation site, we were able to decrease oxidative stress and obtain an improved bone formation. These findings represent a promising step toward developing a more reliable bone augmentation method using EDA.

This award is a significant milestone in my academic journey. I want to extend my deepest gratitude to my supervisors, Professor Uoshima Katsumi and Dr. Akiba Yosuke, as well as the faculty and Ph.D. students of the Division of Bio-Prosthodontics, for their invaluable guidance and support.



受賞報告

包括歯科補綴学分野 大 川 純 平

この度、日本補綴歯科学会第133回学術大会において、令和5年度奨励論文賞を受賞いたしましたので、ご報告いたします。

本論文“Developing tongue coating status assessment using image recognition with deep learning”では、口腔衛生状態の指標となる舌苔の付着度について、人工知能（AI）を用いた評価手法を提示しています。舌苔は、口腔機能低下症の診断基準の1つとして視覚的に評価されていますが、評価者間のばらつきや詳細な評価が難しくあります。そこで、舌に特化した画像認識

AIを生成することで、舌の写真から、舌苔の付着度を詳細かつ高い精度で評価することを可能としました。本AI技術を応用することで、口腔機能の維持に寄与できるよう、研究を進めたいと思います。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導いただきました大阪歯科大学高齢者歯科学講座の小野高裕教授、本学包括歯科補綴学分野の堀一浩教授、ならびに研究にご協力していただきました方々に心から厚く御礼申し上げます。



授賞式にて（筆者、左から4番目）

学会受賞報告

包括歯科補綴学分野 善 本 佑

この度、令和4年度 日本補綴歯科学会 奨励論文賞を拝受いたしました。

受賞論文名は“Effect of mandibular bilateral distal extension denture design on masticatory performance”で、下顎両側遊離端義歯を使用している高齢者を対象に、その設計が咀嚼能率に与える影響を検討したものです。結果、咀嚼能率は機能歯数、咬合支持数、レスト数との間に正の相関を認めました。また、ロジスティック回帰分析では、機能歯数と間接支台装置の有無が良好な咀嚼能率と有意に関係しており、

下顎両側遊離端義歯症例における間接支台装置の設置が、咀嚼能力向上に有利に働くことが示唆されました。今回の受賞を励みにし、これからも社会に貢献できるような研究に尽力してまいります。

最後になりましたが、本研究の遂行に際し、ご指導を賜りました小野高裕先生をはじめ、共著者の先生方、また、数多くのご助言やご協力をいただきました諸先生方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。



授賞式にて、筆者（左）

The Best Original Research受賞報告

包括歯科補綴学分野 高 野 日南子

この度、令和5年6月に開催されました34th Annual Congress of European College of Gerodontologyにおいて、The Best Original Researchを受賞いたしましたので、報告いたします。European College of Gerodontologyは、ヨーロッパにおける高齢者歯科学に関する学会であり、高齢者に関わる様々な分野の研究者が集まります。今回は、セルビアのベオグラード大学にて開催されました。

私は、「Masticatory behaviours change after prosthodontic treatment with dentures: a pilot study」という演題でポスターによる発表をいたしました。今回の研究では、咀嚼回数計測装置を用いて義歯治療前後での咀嚼行動の変化を調査し、臼歯部咬合支持域の有無により咀嚼回数・速度の変化に異なる傾向がみられました。この発表でのヨーロッパの高齢者歯科学の研究者との議論は、大変良い経験になりました。今後は被験者を増やし、研究を進めていきたいと考えてい

ます。

最後になりましたが、ご指導いただきました堀一浩教授ならびに研究にご協力していただきました方々に心から厚く御礼申し上げます。



受賞式にて（筆者：左）

Report on the 14th Biennial Congress of the Asian Academy of Prosthodontics (AAP) - Shiau-ROC TAIWAN Award

Division of Comprehensive Prosthodontics Min Thu Ya

I am pleased to announce that our oral presentation titled “*Relationship between Oral Health and Cognitive Function in Older Adults: A Longitudinal Study*” received the Shiau-ROC TAIWAN Award at the 133rd Annual Meeting of the Japan Prosthodontic Society and the 14th Biennial Congress of the Asian Academy of Prosthodontics, held in July 2024.

Our study examined the relationship between oral health factors and cognitive function in 583 older adults) over a two-year period. We assessed various factors, including the number of remaining teeth, masticatory performance, occlusal force, oral diadochokinesis, and tongue pressure, and measured cognitive function using the Japanese version of the Mini-Mental State Examination (MMSE). Our key finding was that oral diadochokinesis, particularly the

“ta” sound, is significantly associated with changes in cognitive function over time. This suggests that improving oral motor function may be essential for maintaining cognitive function in older adults. These results contribute to our understanding of the relationship between oral health and cognition and may guide future preventive strategies for cognitive decline.

Presenting at this international conference was an invaluable experience, providing an opportunity to engage with leading researchers in prosthodontics from across Asia. I would like to express my sincerest gratitude to Dr. Yoko Hasegawa for her patient mentorship throughout this study and to everyone involved in the Sasayama Longitudinal Cohort Study. Their support and guidance were crucial in achieving this recognition.



At the award ceremony of the 14th Biennial Congress of the Asian Academy of Prosthodontics
(The author, second from the left)

第6回JPS student clinical skills competition 最終選考優秀賞 受賞報告

歯学科6年 青 木 直 美

この度、日本補綴歯科学会主催学生技能コンペティション「第6回JPS student clinical skills competition」におきまして、最終選考優秀賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

このコンペティションではCAD/CAM冠を想定した支台歯形成を30分で行います。形成した支台歯はスキャンされ、理想的な支台歯形態にどれだけ近づけているか細かい数値を含めて審査されます。

これまでの補綴装置は歯科医師と歯科技工士それぞれの暗黙の了解の中で製作されており、非常に曖昧な部分が多いように感じていました。生体にあわせて製作するものなので、当然のことともいえるのですが、例えば装置の破損が起きた時にどこにエラーがあったのかを検証することが難し

く、また責任の所在がどこであるのかも曖昧でした。しかし、CAD・CAMが補綴装置製作に用いられるようになったことで、歯科医師が形成した支台歯はデータ上でどこまでも拡大できるようになり、必要なクリアランス、テーパーが確保されているのか具体的な数値で検証できるようになりました。歯科医師にはより一層高い技術力が求められていくのではないかと感じています。JPSに参加させて頂いたことは大変良い刺激となりました。

最後になりますが、大会直前まで練習にお付き合いいただいた江口香里先生、お忙しい中直接ご指導くださった魚島勝美名誉教授、そしてアポイント無しで押しかけても丁寧なアドバイスをくださった生体補綴学分野の先生方に心より感謝申し上げます。



素 顔 拝 見

口腔生化学分野

市 木 貴 子

2021年5月より口腔生化学分野に所属させていただいております、市木 貴子（いちき たかこ）と申します。赴任してから3年経つのですが、前号の歯学部ニュースの編集担当の際、この「素颜拝見」に未参加であったことが判明し、遅ればせながら、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は広島県広島市で、中高一貫女子高のノートルダム清心高校を卒業し、九州歯科大学歯学部を卒業しました。その後九州大学病院で歯科医師臨床研修を行った後は、臨床に携わることなく基礎研究のみ行ってきました。学部学生時に、後藤哲哉先生（現 鹿児島大学歯科機能形態学分野教授）のご厚意により研究室に出入りさせていただき、知覚神経系による骨代謝制御メカニズムの研究に携わらせていただいたことで、基礎研究の面白さに目覚め、基礎研究者になることを決意し今に至ります。基礎研究は基本的には地味で根気のいるもので、特に論文のリバイス実験等になるとかなりの忍耐を必要としますが、初めて実験系がうまくいったときや新たな知見が得られたときの喜びは何事にも代えがたいものがあります。私が



加茂川の鯉のぼり 子供と一緒に

していただいたように、歯学部の学生さんたちや大学院生に基礎研究の面白さを伝えていきたいと考えております。

大学院は順天堂大学医学部生化学第一講座にて横溝岳彦先生のもと、ロイコトリエン等の脂質メディエーターとその受容体の機能解析に従事いたしました。博士課程修了後、かねてより興味のあった神経科学研究に従事したいと考え、4年ほど米国カリフォルニア工科大学Oka Lab (PI, 岡勇輝先生) にてポスドク研究員として研究を行っておりました。飲水行動を制御する神経基盤の解明に取り組み、消化管における浸透圧センシング機構の解明を目指した研究を行いました。帰国後、新潟大学スイングバイプログラムにて採用いただき、口腔生化学分野で研究を開始しました。生化学のバックグラウンドを活かしながら、マウスを用いた*in vivo*イメージング実験を行い、内臓感覚メカニズムの解明に取り組んでいるところです。新潟には一度も訪れたことのない状況で、夫（歯科麻酔科 山本徹）とともにカリフォルニアから赴任いたしました。最初は冬の天気的不安定さ、寒さに驚愕しておりましたが、やっと慣れてきたところです。私生活では娘が現在2歳のイヤイヤ期まただ中で、頭を悩ませつつも日々育児に研究に奮闘しております。ちなみに、広島出身で父から英才教育を受けたこともあり、野球観戦が趣味で、大のカープファンです。今年は9月に大失速しとても残念でしたが、来年以降に期待してめげずに応援します。

最後になりましたが、研究室の照沼美穂教授をはじめ、お世話になっている先生方に深く感謝申し上げます。微力ながらも新潟大学に少しでも貢献できるよう努めてまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



摂食嚥下リハビリテーション学分野

笹 杏 奈

令和6年4月1日付で摂食嚥下リハビリテーション学分野の助教を拝命致しました、言語聴覚士の笹杏奈と申します。歯学部ニュースの「素顔拝見」の執筆の機会をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

生まれは北海道留萌市（るもい）で新潟市より風も強く雪も1時間で膝丈ほどまで積もり、1m先が見えないと年始の全国ニュースに良く取り上げられる豪雪地帯で育ちました。高校からは札幌市で過ごし、札幌日本大学高等学校に通ってました。高校では、勉学に励むとともに茶道部に所属しお茶を立てたり、学祭に向け浴衣の着付けを覚えたりと過ごしておりました。一方、私生活では、草サッカーチームの審判をしていた父の影響でサッカー観戦が趣味となり、北海道コンサドーレ札幌の試合はホーム戦全試合観戦と足しげく通っておりました。今でもサッカー観戦は大好きで、新潟に来てからはじめての「遠征」を経験しました。コンサドーレに限らず、アルビレックス新潟の試合はもちろんのこと、日本代表の試合も現地観戦しております。ゴール裏の旗振りの最前線で応援しております。テレビにチラッと映ることがしばしばあるので、ぜひ探してみてください。

私が言語聴覚士を目指したきっかけは、高校時代にひょんなことから言語聴覚士の仕事に触れる

機会があり、私が大好きな話すことや食べたり飲んだりすることに障害が起こり困っている方がいること、そしてそれを治療するためのリハビリ職があることを知り、これは天職かもしれない！と思い、北海道医療大学心理科学部（現 リハビリテーション科学部）言語聴覚療法学科へ進学致しました。大学では、私が井上誠教授にお会いするきっかけを作ってくださった恩師の飯泉智子先生と出会い、今でも刺激を受けており目標の先生です。2015年3月に言語聴覚士免許を取得し、同年4月より札幌市内の急性期および回復期病棟を持つ中核病院にて勤務し、2017年1月より摂食嚥下リハビリテーション学分野に入局し、大学病院における嚥下臨床、在籍されている先生方の研究業務に携わらせていただきました。更に摂食嚥下機能をより深く探求すべく2018年4月から大学院に進学し、モーションキャプチャによる顎運動や嚥下内視鏡画像、筋電図波形から固形食品の咀嚼嚥下動態の解析を行っておりました。大学院修了後は、新潟市内の回復期病院に2年間在籍するとともに、非常勤研究員として医局に籍をおかせていただいております。

最後になりますが、新潟大学歯学部で助教として初めて採用となった言語聴覚士として、身の引き締まる想いです。どのような形で新潟大学歯学部の発展に寄与できるのか、手探りではございますが、研究臨床教育にと精進して参りたいと思っておりますので、今後とも何卒宜しくお願い致します。



顎顔面口腔外科学分野

小 林 亮 太

2024年4月より、顎顔面外科学分野の助教を拝命いたしました小林亮太と申します。この場をお借りして、簡単に自己紹介をさせていただければと思います。

私は新潟市北区豊栄の出身です。地元の光晴中学校に通っておりましたが、当時の学校は大変荒れており、窓ガラスが割られたり、体育館裏でたばこが見つかるような環境が日常でした。その後



2023年10月サッカー日本代表vsカナダ代表戦@デンカビックスワンスタジアムにてサッカーメディアのゲキサカデビューを飾りました

は新潟高校、新潟大学というように、ほぼ生活圏が変わっておりません。二世歯科医師ということも相まって、強く自己主張することもなく、狭い範囲の中だけで生きてきてしまったのではないかと最近思うようになり、私の人生とは何か、やるべきことは何かと考える毎日です。

大学院は生体組織再生工学分野の泉健次教授の基で研究をさせていただきました。研究の基礎的な知識や技術はもちろんのこと、研究に向き合う姿勢や考え方などを教えていただき、とても充実した毎日を送らせていただきました。大学院卒業後、一般的には数年ほど関連病院への出向となりますが、私は大学に残り、研鑽を積む機会をいただきました。特に、口蓋裂や顎変形症に関する診療と手術を中心に取り組んでおります。当科は昨年で開講50周年を迎え、当初から口蓋裂診療に力を注いできた伝統がありますが、近年は医局員の減少もあり、その継続が難しい状況に直面しています。若輩者ながらこの灯火を絶やさぬよう、次世代へ引き継ぐためにも日々精進しているところであります。医局の伝統と弊習を勘違いしないように、これからの新しい医局体制に少しでも貢献できればと考えております。

そんな中、日々のストレス発散とリフレッシュは食事とワインが担ってくれています。特に食事に関しては、医局内で師匠と仰ぐ先生から紹介いただいたお店に通ったり、時には県外まで足を延



ワインと私

ばして美味しいものを探しに行くこともあります。一方で、ワインに関してはここ数年で深くのめり込むようになり、主にフランスワインを嗜んでおります。最近、ワインセラーを大き目のもの買い替えましたが、気付けばすぐに満杯になってしまい（外に溢れたりして）、家族からの冷たい視線に肩身の狭い思いをしています。今年の夏は「泡」をテーマに多くのスパークリングワインを楽しむことを目標に掲げ、数多くのおいしいシャンパンに出会えたことが何よりの収穫でした。ワインを通じて新たな発見や人とのつながりを楽しむ時間は、私にとってかけがえのないものです。

これまでの人生を振り返ると、荒れた環境から始まり、いろんな人との出会いで多様性に触れ、責任ある仕事に就くまでの経験はすべて、自分を形作る大切な要素だったと感じています。これからも医療現場での研鑽を続ける一方、大切な人と一緒に趣味を謳歌しつつ、新しいことへの挑戦を楽しみながら人生を歩んでいきたいと思っています。



摂食嚥下リハビリテーション学分野

菊池 裕子

2024年4月1日付で摂食嚥下リハビリテーション科の特任助教を拝命いたしました。菊池 裕子と申します。この度「素顔拝見」の執筆の機会を頂戴しましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

出身は新潟市南区で3年間、学校町にある高校に通学していました。そのため、〇十年ぶりに？再びこの地へ毎日通うことに懐かしく不思議な感じがしています。さて、話がそれましたが、高校卒業後、親元を離れて都会へ行きたいと強く思い東京の女子大へ進学、一般企業へ就職、結婚した相手が歯科医（開業医）であったことから、手伝って彼を支えたいと思い？歯科衛生士となって働いておりました。

しかし、何が起るかわからないのが人生です。身内の者が、手に力が入らないと新潟大学医

歯学総合病院の脳神経内科へ検査入院し難病であることを告知されました。それから診療所と介護の二重生活が始まりました。この介護の経験から、看護師になって患者さんを支えていきたいと思い、新潟大学医学部保健学科 看護学専攻へ社会人入学、卒業し看護師として働きながら大学院へ進学しました。

ここで、私の新潟大学大学院保健学研究科での研究を紹介いたします。先にもお話した通り私は、看護師として病院に従事していた中で、低栄養や誤嚥性肺炎に容易に罹患してしまう高齢患者を数多くみてきました。患者の療養上の世話は看護師の役割の一つで臨床現場において、口腔ケアや食事介助など常に患者のケアを行い観察し異常をいち早く発見するのは看護師です。これにより、看護師が患者の口腔内や食事の評価を簡便にスクリーニングできるアセスメントシートについて研究しこの春、無事に卒業いたしました。

そしてこの先、どうしようかと考えた時、私は歯科衛生士でもあるため、保健学と歯科学、両方の視点から研究できないものかと考えていたところ、摂食嚥下リハビリテーション学のパイオニアで研究の共著者として論文のアドバイスを頂いていた井上誠先生のもとで学びたいと門をたたき現在、大学院生兼特任助教として日々奮闘し充実した毎日を過ごしております。

最後に、歯学部出身ではない私のような他分野の者が学べる場がある大学の懐の深さに敬意を払

いつつ、この場をお借りして井上誠先生に心より感謝申し上げます。そして、未熟者でございますが、新潟大学の発展に貢献できるよう尽力していく所存です。皆様、今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



生体歯科補綴学分野

土 橋 梓

2024年4月1日付で生体歯科補綴学分野の特任助教を拝命いたしました、土橋 梓と申します。この度、歯学部ニュースにて貴重な執筆機会をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は山梨県笛吹市です。温泉街が近く、桃や葡萄が名産で、実家から富士山の山頂が見える場所で高校時代まで住んでいました。

新潟大学歯学部49期生として入学し、個性豊かな同期に恵まれ、楽しい6年間を過ごしました。硬式テニス部に所属し、部活動を通してテニスの技術向上や体力維持に加え、上下関係の厳しさや、同期との助け合いといった有意義な学びを得られました。趣味である旅行も大学時代から始まりました。海外旅行をするために様々なアルバイトをしていたことも、今となっては歯科医師以外の仕事をする良い経験となりました。旅行に行くとその時その場でしか得られない感動があり、その魅力に夢中になり、コロナ渦が明けてからまた海外に出かけています。

2019年に卒業し、研修医修了後、生体歯科補綴学分野の大学院へ進学しました。当分野では、大学院の4年間は臨床と研究の両立にTA業務も加わり、多忙な日々を過ごしましたが、同じ研究グループの先輩後輩、他分野の同期に支えられ多くの業績を残すことができました。入局当初は臨床を頑張りたいと思っていたものの、メンターの加来先生の臨床・研究に対する熱い思いに圧倒され、私も少しずつ基礎研究での面白さと、研究成果が出たときの達成感などを感じられるようになりました。まだまだ未熟ですが、研究者としての第一歩目を踏み出した大学院時代でした。



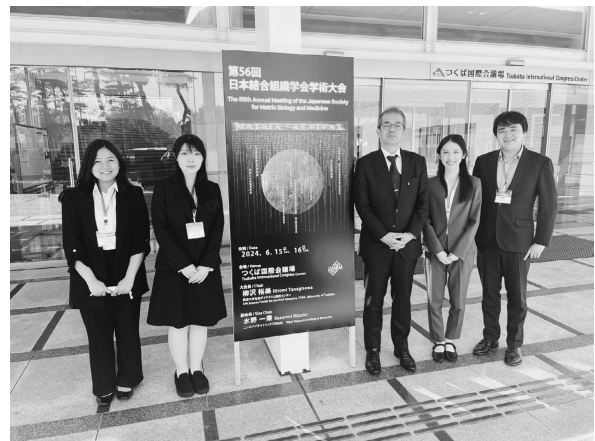
桜満開の京都にて

大学院卒業後は、生体歯科補綴学分野の特任助教と、全学のPhDリクルート室育成助教を兼任しております。PhDリクルート室では、主に博士人材のキャリア開発支援を行っています。私はキャリア支援のイベント運営補助や、博士学生支援プログラムに参加している学生の面談や相談窓口の仕事を行っています。歯学部には所属していると、アカデミアに残って歯学研究者の道、または臨床医の道のいずれかがほとんどであるため、卒後のキャリア形成の難しさを初めて知りました。まずは博士号取得直後の新鮮な気持ちで、博士課程の魅力を学生に伝え、学生に寄り添った相談ができるよう尽力したいと思います。

当分野では、大学院時代よりも臨床が増え、慌ただしい毎日を送っています。研究においては、大学院から続けている歯根膜とその細胞外マトリックスの研究について幸運にも日本生化学会でシンポジストとして発表をしました。著名な先生方と並ぶのは大変恐縮でしたが、我々加来班の研究内容の面白さを伝えることができ、最終目標で

ある歯根膜再生につなげられるように今後も更なる研鑽を積みたいと思います。

最後に、未熟ではありますが、生体歯科補綴学分野だけでなく新潟大学歯学部的发展に貢献する所存です。今後とも御指導御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



加来班のメンバーと日本結合組織学会にて
(著者右から2番目)



Japan: a new exciting journey

Division of Periodontology Tran Thi Thuy Diep

Greetings from Niigata! My name is Tran Thi Thuy Diep, you can call me Diep. I am from Vietnam, a beautiful country in South-east Asia, just a 5-hour flight from Tokyo. I had the opportunity to participate in Niigata University's student exchange program in March 2018, and I returned again in October 2022 to pursue my graduate studies - officially living in a foreign country for the first time.

The first time I came to Japan as an exchange student, everything was new and exciting. Every dish I tried was delicious and tempting, every place I visited was beautiful. But when I returned as a gradu-

ate student, I felt something different - the feeling that I had truly settled here and had become a part of Niigata City. I found myself worrying about what my life over the next four years would be like - whether I would miss my hometown, whether I could excel in my work, and whether I could adapt to this new life and this new city.

I was so worried because, honestly, I had very little experience with scientific research before. The PhD program itself felt like an endless ocean. Every day, I delved deeper into a world of complex research, academic papers, trials, and failures. I often found myself doubting my abilities:



Spring - Niigata 4/2023



Summer: Fujisan 8/2023

What if I am not smart enough? What if my research is not good enough? Fortunately, I have always had the support of my professor and supervisor. They have taught me to think critically, ask deeper questions, and strive for excellence - but they have also emphasized that failure is part of the process. It is okay to make mistakes, as long as you learn from them and keep pushing forward. I am deeply thankful for everything I have learned so far.

I have also been lucky to have the opportunity to present posters and oral presentations at many places, both in Japan and abroad. As a small Vietnamese girl who had never left Asia, I never imagined that one day I would have the chance to set foot in the United States and present my research project there. Without the guidance and careful mentorship from my professor, my supervisor and labmates, I wouldn't have been able to achieve this.

In addition to studying and conducting

research, I feel very fortunate to have the time to explore new places, through opportunities to attend scientific conferences and also by traveling on my own. As a country with a rich history and tradition, each prefecture in Japan has its own unique cultural characteristics, from mascots and famous foods to special souvenirs that represent the area. Everywhere I have traveled, I have had the chance to enjoy beautiful natural landscapes and learn a lot about Japan's culture and history. One other form of travel that I find particularly interesting, and is also one of my hobbies, is hiking. As a hiking lover, Japan has been a wonderful place for me to explore and enjoy the mountain views. The mountains here are spectacular, and every hike brings a sense of peace and adventure. The most remarkable experience was the opportunity to climb Mount Fuji to its summit. It was truly unforgettable. The climb was difficult, my legs ached, and I questioned whether I could



Autumn: Kamikochi 10/2024



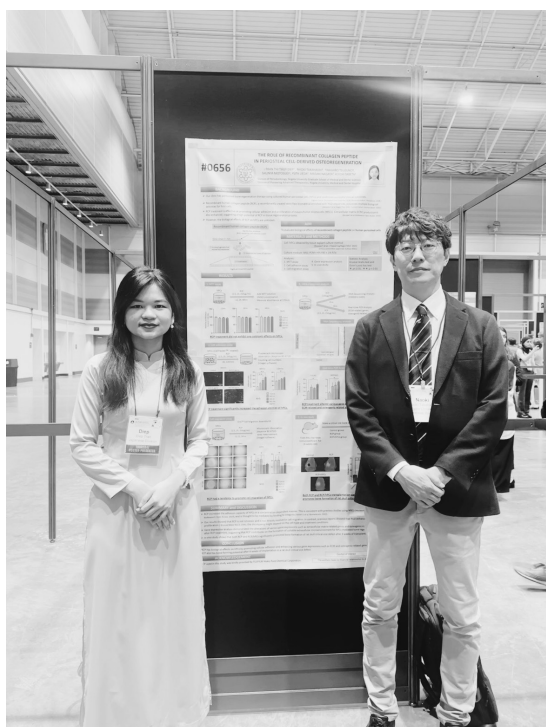
Winter - Niigata 1/2023

make it to the top. But when I reached the summit, I was greeted by a breathtaking sunrise view that left me speechless.

I believe that the weather in Niigata is always a big challenge for international students from tropical countries like Vietnam, where it is hot year-round. The weather in Niigata is also often windy, with little sunshine. The first winter was particularly difficult, as the temperature dropped sig-

nificantly, and the snow fell heavily. If it were not for the support and warmth of my friends, I think I would have felt very sad and exhausted. However, I have learned to appreciate the beauty of all four seasons here. Although winter is cold, the falling snow is still beautiful and romantic. I can also go skiing and enjoy soaking in an onsen. A few months later, spring arrives with beautiful cherry blossoms everywhere. When the flowers bloom, my friends and I go to Hakusan Park every day to have lunch and enjoy the flowers. Summer comes as the time to swim, hike, and enjoy the beautiful sunshine after rainy days. And then comes autumn, when I can admire the gradual transformation of the leaves, with green, yellow, and red hues intertwined.

Living in Niigata has been more than just academic growth—it has been a transformative experience. It is a reminder that life, like nature, has its seasons of challenges and beauty, and with each season, I am becoming a stronger, more confident version of myself. Japan has not only shaped me into a better researcher but also into a better version.

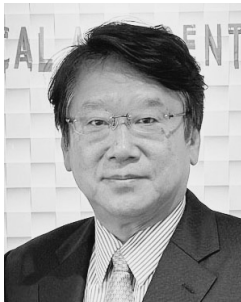


Poster presentation at IADR,
New Orleans, USA 3/2024

退職によせて

定年退職にあたって思うこと

高度口腔機能教育研究センター 教授
前 田 健 康



私は令和7年3月31日をもって、新潟大学を定年退職します。昭和53（1978）年に本学歯学部歯学科に入学して以来、大学院を含めた10年間の学生生活、加えて37年にわたる教員生活、計47年にわたる新潟大学での生活を終えることができることは非常に感慨深いものがあり、数々の出来事が思い出されます。

私は定員40名のクラスの歯学科14期生で、ほとんどの現教員が経験した大学共通第1次学力試験を受験せずに、国立大学を受験した最後の世代です。歯学部学生時代は余力を残して（伸びしろを残して？）卒業したお世辞にも真面目な学生とはいえませんでした。試験は一夜漬け対策でこなしただけで、ほとんど再試験を受けることなかった学生でした。両親は卒業後、地元福井に戻り、開業でもしてくれれば、と思っていたようですが、学部時代の比較的早い時期に、大学院に進学して、どこか外国に留学したいという希望を持っていました。

大学院（歯学基礎系：口腔解剖学第二講座）を修了した昭和63（1988）年4月に文部教官助手（歯学部口腔解剖学第二講座）に採用され、平成3（1991）年11月に講師、平成4（1992）年4月に助教授に昇任し、平成6年4月から平成7年2月まで文部省在外研究員として、米国シアトル市ワシントン大学医学部麻酔学講座に留学しました。帰国後、前任の高野吉郎教授（現東京医科歯科大学名誉教授）の転出に伴い、平成8（1996）年11月に教授に昇任しました。昇任時、37歳2ヶ

月という鼻っ柱の強い若造でした。37年にわたる教員生活中、教授歴は28年余りにおよび、教員歴の3/4を教授として過ごしました。いくら若輩でも、教授は教授で、いろいろな仕事がつてきました。というのも、今では想像できないと思いますが、全ての委員会委員は教授会の投票により民主的？に決められていましたので、ほとんどの委員会の委員に毎回ほぼ満票で選出されていました。この悪習という慣習は私が学部長になったときに適材適所という観点から取りやめましたが。

教授に昇進した際、とある高名な先生から、教授として成功するためには5つのEをいつも心がけなさいという言葉いただきました。Encourage、Economy、Entertainment、Enthusiasm、Ethicsの5つです。また5年スパンで講座運営を考えなさいということも教えていただきました。したがって、教授生活28年をほぼ5クールで回せばいいなあとはぼんやりと考えていました。

教授になれば、学生教育、研究、講座の運営のための外部資金獲得などやるべきことが多々ありますが、40前の若さもあり、なんとか無難にこなしていました。幸いにも臨床系の講座から多くの大学院生（必ずしも優秀とは言えないが「もちろん優秀な人もいた」、バイタリティーがあった）が口腔解剖学第二講座（現口腔解剖学分野）に集い、研究にも遊びにも何事にも全力を尽くしていたので、業績もあがり、各種の外部資金の獲得にも成功していました。研究重視の基本方針をもって教授に就任しましたが、大学院部局化、教育改革などさまざまな諸問題への対応に身を置くこととなりました。大学院部局化には山田好秋名誉教授の無理難題？に対する下請け作業をこなしました。また当時の学部長の花田晃治名誉教授には「前田、おまえ教育は好きか？」と突然尋ねられ、「いえ、研究の方が」、「それなら教育改革をやれ」という意味不明なやりとりで、教育改革の真っ只

中に身を置くことになりました。それと同時に学務委員会委員長、平成14年7月には歯学部副学部長兼新潟大学評議員に任命され、私の以後のキャリアに大きな影響を与えることになりました。

教育改善に資するプロジェクトでは、学長裁量経費により、PBLの海外調査研究を行い、日本の歯学部でいち早くPBLを導入しました。当時は教育改善・改革なんか片手間でいいやと思っていたのですが、この経験により、40代半ばから文部科学省の教育WSのファシリテーターやコーディネータ、共用試験委員、在英国日本大使館での講師、モデル・コア・カリキュラムの改定委員、歯学教育の改善充実に関する調査研究協力者会議委員等、歯学教育に関わる多数の委員を歴任しました。この際、文部科学省や医学教育に精通した多くの方々との知己を得ることができ、私自身の教育に対する考え方をスキルアップすることができました。ほかに歯科医師国家試験委員（4期8年）や同出題基準の改定（副部会長）にも関わることができました。

また、40代後半から、歯科基礎医学会、日本歯科医学教育学会、日本解剖学会等の学会役員、各種委員会委員に任命されるとともに、平成19（2007）年度から現在まで日本学術会議連携会員に、平成27（2015）年度から3年間、日本学術振興会学術システムセンター専門研究員として日本の学術振興に微力ながら貢献してきました。さらに、大学改革支援・学位授与機構や大学基準協会による大学評価（機関別認証評価や国立大学法人評価等）にも携わり、ほとんどの教員の方々が経験することがないような多種多様な業務に携わることができました。

教授になって10年目の47歳の時に、歯学部長に選任されました。この時は8期16年も務めるとは夢にも思わず、2期4年で終わ리と思っていました。学部長就任時には教授会構成員は全て私の年上で、教授会に臨むときは予習が欠かせず、またストレスの嵐でした。学部長に就任する際、心に決めていたのは「新潟大学歯学部を強い歯学部にしたい」というものでした。このことは昨今のQSランキング (<https://www.topuniversities.com/university-subject-rankings/>

dentistry?search=Niigata) や上海アカデミックランキング (<https://www.shanghairanking.com/rankings/gras/2024/RS0403>)、さらには科研費の採択状況等をみても、ある程度達成されたのではと考えています。当時、新潟大学歯学部は、まだ、親方日の丸からの脱出にあがいており、教育、研究、国際交流などさまざまな面で、いわゆる地方国立大学歯学部の域を脱することはできていませんでした。強い歯学部をつくるにはなにが必要なのでしょう？私が考えたのは、構成員のベクトルを同じ方向に向けさせ、学部長が自ら率先して模範を示すことだろうと考え、自分で行動することを心がけました。まあ、これが自分の首を絞めることになると思うまでに、そう時間はかかりませんでした。そうこうしているうちに、学内はもとより、日本学術振興会学術システムセンター専門研究員などの学外の仕事も増え、口腔解剖学分野担当教授として、学生教育、研究にさくことのできる時間はほとんどなくなり、さまざまな人に迷惑をかけることになっていました。そこで、平成27（2015）年に文部科学省経費として採択された事業「ネットワーク型教員組織の構築によるレジリエンスな教育研究拠点の形成」により、高度口腔機能教育研究センターを設置し、このセンターへの配置換えさせてもらいました。このセンターでは若い人達を中心に学際的研究を行っており、またこのセンターを予算獲得のためのコアとして、活動を行っています (<https://www.caos-niigata-univ.net/>)。

歯学教育は医学教育と異なり、精神運動領域の教育すなわち技能教育の占める割合が非常に高く、よい教育を行うにはカリキュラム改善などのソフトの改善に加え、実習設備の更新をする必要がありました。この頃は文部科学省事業として教育GPが花盛りで、各大学がこの手の教育系の外部資金の獲得に必至でした。本学歯学部は幸いにも平成18年に特色ある大学教育支援プログラム（学生主体の三位一体新歯学教育課程 社会に貢献する包括的歯科医師の育成を目指して）、平成20年には大学院教育改革支援プログラム（プロジェクト所属による大学院教育の実質化）、平成24年には大学間連携共同教育推進事業（連携機能

を活用した歯学教育高度化プログラム）が立て続けに採択され、現在の歯学部教育の基盤をつくることができました。しかし、これらのGPの補助金額は小さく、懸案だった実習設備の更新はできず、なんとかして、病院歯科ユニット更新も含めた実習設備の更新しなければならない時期にきていました。幸いにも教育改革の実績もあり、文部科学省との度重なる折衝により、病院ユニット更新、ファントム実習室整備、相互実習室、バーチャルリアリティを活用した実習設備などを整備することができました。特に病院歯科ユニットは、学部長2年目に新潟で開催された国立大学歯学部長会議で、教育用歯科ユニット更新の道をつけ、全国で最初に教育用ユニットを5台導入することができ、その後の外来棟移転の際の全ユニット更新につながりました。また病院技工士、病院教員や6年生の学生技工機の更新も補正予算を獲得することで更新することができました。当然ながら、今後はこれら設備の更新が喫緊の課題となっており、私の退職後の学部長、副病院長（歯科担当）には予算獲得に全力を尽くしていただきたいと思います。

研究面ではやはり教員人事の成否が大きなウェイトを占めると考え、積極的に有能な人材の外部からの登用を行いました。研究を行って来なかった人、論文を書いてこなかった人は、教授になっても研究指導、論文執筆ができるはずがありません。また研究を進めるにあたりの外部資金獲得の重要性もいうまでもありません。科研費に代表される外部資金の獲得は基盤的経費が削減される中、その重要性はますます増えています。科研費を取るには一種のコツがあり、そのノウハウを構成員で共有しなければ、組織的に外部資金を獲得できません。私はターゲットとして若手研究、基盤研究（C）申請者を対象に、講演会、WSを開催し、底上げを図りました。その結果、2019～2023年度の累計では新潟大学歯学部の歯学系領域での新規採択率は全国1位となっています（この号が発刊される頃には2024年までの結果が出ます）。また歯学部（大学院（歯））構成員の課題保有率は2019年度には70%を超え、私の在任中は65～70%間を推移していましたが、今年度は60%に

低下してしまい、早急な対応策が求められます。また実習設備同様最先端の研究設備の導入・更新も維持管理も重要な課題です。私が学部長在任期間中は概算要求事項、科研費などを獲得し、基盤経費を節約することで高額な最先端の研究機器を導入してきました。現在、概算要求や他的高額な外部資金の導入が極めて困難となっている中、どのように導入・更新を行って行くのか、知恵をだす必要があります。若手、シニア研究者にとらわれず、大型研究費を取れる研究者が結集して大型プロジェクトを立ち上げることも重要でしょう。またそのような研究チームには研究資金、人材の集中化も必要でしょう。そのために質の高い論文の発表が不可欠です、例えば、学部としてQ1ジャーナルの掲載された論文しか評価しないとか、大学院の早期修了者の学位論文はQ1ジャーナルの掲載された論文に限るとかの思い切った取組が必要でしょう。特に、概算要求で設置した高度口腔機能教育研究センターの活用が予算獲得、人材獲得の面で、今後ますます重要になるでしょう。

強い歯学部をつくるために、教育、研究の充実に加え、私は国際化も大きなウェイトを占めるファクターと考えていました。私が学部長に就任する前の姉妹校の数は9ヶ国17校しかなく、しかもそのほとんどと交流が途絶えていました。学部長に就任すると山田好秋名誉教授から「台湾・国立陽明大学（現国立陽明交通大学）歯学部のProf. Allenが新潟大学歯学部と国際交流をやりたい」との話をうけ、交流協定書にサインをしたのが、国際交流にかかる私の初の仕事となりました。その後、こちらがほとんど知らない歯学部からも協定の申し込みがあり、その結果、私が学部長を退任する際には姉妹校の数は23ヶ国54校に増加しました。しかし、大きな反省点もあります。私の経験では、教員の研究の知己で結んだ姉妹校協定はほとんどワークしていません。その教員またはカウン터パートの教員が退職したり、研究費が途絶えたりすると、その姉妹校交流はほとんど機能しなくなり、単なる名前だけの姉妹校協定となっています。学生交流、留学生獲得そして教員の研究交流の3点をセットにした組織的取組がなけれ

ば、国際交流は決してうまくいかないと考えています。宮崎秀夫名誉教授、魚島勝美名誉教授のご尽力（まあ無理難題的なごり押しも多々ありましたが）により数度にわたりASEAN諸国との国際シンポジウムを開催することができ、強力な国際交流ネットワークをつくることができました。これにより、学部交換留学生や国費留学生の獲得につながりました。幸いにもこのネットワーク形成には文部科学省から多大なご支援をいただいたおかげで、若手教員、大学院生に英語で発表する機会を与えることができ、また新潟大学の研究力の高さを知らしめることにより、新潟大学歯学部のブランド力を高めることならびにグローバル化の推進がはかられたと自負しています。

国際化へのさらなる飛躍となったステップは国費留学生優先配置プログラムの採択でした。従来、国費留学生の獲得は在外大使館から推薦されてくる留学生を受け入れるいわゆる「待ちの留学生獲得」でしたが、現在では、教育プログラム毎に大学が受け入れ許可を与えることができる仕組みができています。これが国費留学生優先配置プログラムです。このプログラムの採択に向けてさまざまな努力を重ねてきましたが、その壁は高くかつ厚いもので、なかなか突破することができませんでした。しかし、令和元（2019）年にASEAN諸国（令和4年に更新）を、令和2（2020）年に南米を対象にしたプログラムが採択され、国際化へ一層の弾みがつきました。ただ、このプログラムは同数の私費留学生の獲得が義務とされており、南米のプログラムに対しては撤退

を余儀なくされました。

これまでの国際化の取組は、「Niigata」のイメージアップに大いに貢献しており、東南アジアの学会に参加すると、新潟大学歯学部への注目度、期待が非常に高いことを感じます。また学部長時代には数回にわたり国際シンポジウムを開催しましたが、概算要求による国際交流関係の予算措置ができなくなっていること、円安の進行が進んでいる中、今までのように本学が費用を負担するという国際交流のあり方は見直す（ありえない）時期にきています。予算獲得の元、これまで構築した国際ネットワークを維持・発展させていく方策が望まれます。今後どのように国際交流を展開していくのかは歯学部の今後の大きな課題です。

これに加えて、学部長として携わった仕事として、歯学部校舎の大型改修、歯学部50周年記念事業などがあります。困難な財政状況の中、歯学部構成員の協力・理解を得て、いずれの事業にも取り組むことができ、自画自賛ではあるものの成功裡に終えることができました。これもひとえに歯学部構成員、学生、そして陰日向に献身的に私を支えていただいた事務職員の皆様方、特に教授不在となるが多かった口腔解剖学分野、高度口腔機能教育研究センタースタッフ、大学院生達のご協力、ご理解にあると思います。ここに厚く御礼を申し上げますとともに、新潟大学歯学部の更なる発展をご祈念し、筆をおきたいと思います。長い間、おつきあいいただき、誠にありがとうございました。

『面白い こともなき世を おもしろく…』

歯科薬理学分野 川 瀬 知 之

学生のときから数えて40余年を過ごした歯学部を去るにあたって特別の感慨はない。しかし、最後の10年間、大学院の演習を選択してくれた学生との交流から、不遇な立場にある若手に多少とも参考となることでも書き残しておこうと思った。

近年、能力全般の多くが遺伝に依存しているということがマスメディアでも広く話題とされるようになってきたが、能力の8割前後は遺伝に依存するらしい。数字の詳細はともかく、個人的には、人生は「運6割、努力3割、才能1割」に支配され、人生において運の占める割合は才能よりはるかに大きいように感じる。断っておくが、「努力3割」というのは才能を磨くための努力というより、どちらかという運をかき分ける嗅覚を身につけ、周辺環境を少しでもよくするための努力であり、また情報収集の努力のことかと思う。

自らを省みると、大学院を中退し助手に採用されたものの、10年も研究室に残ることはないだろうと思い、共済組合の福利厚生事業にも申し込んだことはなかった。しかし、32歳の時のアメリカ留学が大きな転機となった。世の中には、マウントを取って周囲を都合よく巻き込み自分の駒として使いたおし、それを拒むものは徹底的に排除してやろうというタイプと、ほとんどそういうことに興味がないタイプに大別できることがよくわ

かった。前者と関わりを持つ羽目になった場合、「長い物には巻かれよ」とばかりにしれっと宗旨替えしてうまく取り入るか、早々に関係を断つしかないのだが、下手に信念や目標をもっている愚直な田舎者はだいたい悲惨な人生を送ることになる。

「捨てる神あれば、拾う神あり」という言葉もあるが、そのような期待は見えない網目に阻まれることがほとんどだ。最後の10年間、歯学部建屋内での研究スペースを失い、五十嵐の産学連携共同研究棟にレンタルラボを借りることで繋いできた。学生教育から外れたことを契機に、「生涯一研究者」として自ら掘った井戸（研究テーマ）をさらに掘り進めることを選択した。限られた予算とワンオペからダウンサイジングを余儀なくされたものの、学内外から支援を得て世界に通用する研究成果を発信し続けてこれたし（Expertscape.comの指標が興味深い）、開業医向けの教育でも成果を挙げることができた。また望外ながら、面識のない欧米のPRP研究者数人と個人的な信頼関係を築くこともできた。

限られたスペースから言葉足らずとなり、いまひとつ核心が伝わらなかったかもしれないが、それでも迷える若手がこの「底辺からの提言」に何かを感じ取ってくれたら幸いである。要は、運命と割り切ってそれを受け入れてからの後悔しない身の処し方である。

死の床にあって下の句に悩んでいる高杉晋作に望東尼が読んだ「住みなすものは 心なりけり」に答えがあると思っているのだが、第二の人生で引き続き検証してみたい。

私の趣味

歯科技工部門 田 中 正 信

歯科技工部門の田中正信と申します。歯科技工部門の技工業務等のトピックスは他の技工部門の方にお任せして、平成24年度1号の続きとしまして私自身の趣味について書かせていただきます。私の趣味それは「主に自転車」です。東京医科歯科大学勤務時に通勤手段として自転車を始めてから、新潟大学の勤務になり更に拍車がかかります、医科歯科時代は組み立てなどの機材重視でしたが自転車に乗ること自体に楽しみ方が変化していき学内外に自転車仲間ができる幸運にも恵まれ、お誘いもあり佐渡ロングライドなどのイベントにも参加するようになっていきます。楽しみ方が自転車に乗ることに変化した事で困ったことに気付きます、「冬の雪です」マウンテンバイクもありですが20cmも積雪すれば走行困難。そこで新しいアクティビティはないかなと考えて出た答えがスノーシュー（かんじきです）でした。早速購入です、ですが使い方（楽しみ方）やどんな装備にすればいいのかわかりません。調べましたらイベントがありました手持ちのスキーウエアと新品

のスノーシューで参加、周回コースで計6キロ、薄着のランナー派もいれば厚着の冒険者風もいます。スタートすると大半の参加者が走り出し姿が見えない状況に私を含むマイペースは10人程です。スローペースでも汗が止まりません服装の選択ミスです、あまりの暑さにウエアをぬいているとトップに周回遅れにされてしまいました、トップを観察するとスノーシューも私の物と違う！後で知ったのですがランニングモデルの存在を！！結果はほぼ最下位でしたが懲りずにスノーシューイベントに参加し続けていると自転車用のウエアに防寒をプラスする装備が無駄なく快適だと気付きます、毎回ほぼ最下位は変わらないのですが、知り合いも増えていき楽しめてきます。年間を通して外遊びできる感じになりました。最近は恩返ししたい思いもり自転車やトレイルランニングのイベント、ボランティアにできるだけ参加しています。読者の皆様、心身の健康ためにも新しい趣味に挑戦してみませんか。

技工部だより

歯科技工部門 荒井 秀 明

医療技術部歯科技工部門の荒井秀明です。よろしくお願いします。

まず少しでも自己紹介を。といっても2回目なので繰り返しなところもあると思いますがお付き合いください。出身は群馬県です。高校卒業後新潟の技工士学校へ入学、就職は富山県の歯科医院やラボを経て当院中央技工室に勤務し現在に至ります。

高校の部活は空手道部で“全国制覇”なんてものを目指して毎日練習に明け暮れていました。なので立体駐車場のところを通るときにたまに道着を着ている学生を見かけたり、開いてる窓から聞こえてくる基本練習や打ち込みの声が聞こえてくると、一人すごく懐かしく感じています。今年は下の子も小学校に入学し10年近く通った保育園の送り迎えも終わり少しは楽になるかと思いきや、学校に行きたがらないのをなんとか学校まで連れていったり多少大きくなったとはいえすぐ熱を出す子供の特徴は変わらず、お迎えや通院などを頻繁に繰り返している日常です。そんな感じなの

で、急遽休みを取らなくてはならないときにも快く休みを取らせてもらえ子供のところに行ってあげられるというのは大変ありがたく、今の職場には感謝しかありません。

さて、当技工部門ですが昨年の春に新たな仲間が2人加わり令和6年11月現在6名の技工士が在籍しております。一般的な技工物のほか放射線治療用シーネや顎骨3Dモデル、医歯学連携の気管内挿管時に用いる歯牙保護シーネなど大学病院ならではの多岐にわたる様々なものを製作しています。

私が歯科技工士になってから早いものでもう20年になりました。そして、CAD/CAM機器の導入により私が働き始めた頃と歯科技工の世界も大きく変わったと思われます。デジタル機器は日々アップデートされ、歯科材料もどんどん新しいものが出てくる中で私も技工士としての技術を磨くとともに常に新しくなるデジタル技工のスキルや知識を身に付け続けていかなければいけないものだと思っています。

新潟的アプローチでストレスを軽減する！

口腔生理学分野 岡 本 圭一郎

はじめに

食生活は、体を構成する栄養を補給するだけでなく、体の機能を調整する役割があります。新潟の看板である米関連食品で言いますと、たとえば、寒い日、適度な日本酒が日頃のストレスを和らげ、温かい麹甘酒が心を穏やかにしてくれた経験がおありの方も少なくないかと思います。これらは、食品が心理機能を調整する事例です。私たちは、このような効果に根拠があるのか？を調べています。今回、紹介する論文は「米コウジが心理ストレスを軽減できるか？」をテーマに、新潟県を代表する食品である米コウジの可能性を探ったものです（図参照）。

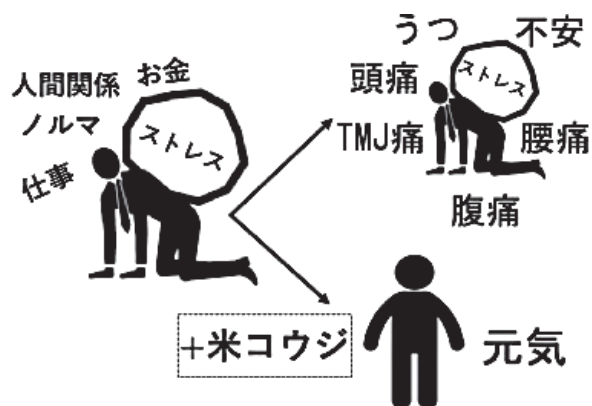


図 米コウジでストレス軽減！

研究の背景

ストレスが続くと気分が落ち込んだり、頭痛や腹痛が生じたりします。ストレス社会とも言われる現代社会では、ストレスを完全に避けることは難しいため、ストレスに強い体を作ることが重要です。そこで食生活を工夫し、ストレスに負けない体（脳）を作ることができれば、不安や痛みを自分自身で制御できる可能性があります。近年の健康ブームに伴い、米コウジの健康効果が注目されています。しかしストレス軽減効果については不明でした。

研究成果

ストレス状態のマウスに米コウジを連日摂取させると、ストレスによる不安や痛み行動が軽減し、さらに脳の視床下部や大縫線核、腰髄の興奮性を改善させることがわかりました。またモデル動物に加え、神経細胞を用いた実験により、これらの効果は米コウジに含まれるエルゴチオネインという物質が関連することが明らかになりました。この結果は、米コウジがストレス軽減に有効であること、そしてその効果の基盤となる分子を示唆します。

おわりに

伝統的な食品は、多くの場合、現代でも健康食として評価されていますが、科学的な根拠が不十分なこともあります。今回の研究は米コウジがストレスを軽減し、気分を改善する可能性を示しています。この研究は、新潟県の代表的な食品である米コウジと地域の食文化とその歴史、現代科学を結びつける試みであり、今後は、他の米関連食品である酒粕、粕酢などのストレス軽減効果などを含め、さらに発展させていきたいと考えています。一連の研究は、歯科薬理学分野の柿原嘉人助教、八海醸造（株）、新潟県農業総合研究所食品研究センターと共同で行いました。

論文情報：

著者：K. Piriyaarasath, Y. Kakiyara, A. Kurahashi, M. Taiyoji, K. Kodaira, K. Aihara, M. Hasegawa, K. Yamamura, K. Okamoto.

論文タイトル：Preventive roles of Rice-koji extracts and ergothioneine on anxiety- and pain-like responses under psychophysical stress conditions in male mice.

掲載雑誌：Nutrients 15(18) 3989 2023. doi: 10.3390/nu15183989.

新潟歯学会報告

令和6年度 新潟歯学会例会報告

令和6年度新潟歯学会集会幹事
予防歯科学分野
竹 原 祥 子

令和6年度は新潟歯学会第一回例会を7月13日（土）に、第二回例会を11月2日（土）に歯学部講堂において開催いたしました。第一回例会では学内外より合計116名の会員の先生方にご参加頂きました。12演題の一般口演に引き続き、「口腔をスキャンする」と題して、堀 一浩先生（医歯学総合研究科 包括歯科補綴学分野）による教授就任講演が行われました。

第二回例会では合計103名の会員の先生方にご参加いただきました。14演題の一般口演に引き続き、神子島 句子先生（口腔生命福祉学講座 福祉学）による「経験に学ぶ ―ソーシャルワーカーとして大切にしていること―」と題した教授就任講演が行われました。

総会、第一回例会、第二回例会において、座長をお引き受けくださった先生、演者の先生方、ご参加くださった会員の先生方のご協力により、令

和6年度の新潟歯学会を無事終了することができました。この場を借りて御礼申し上げます。

令和7年度も引き続き予防歯科学分野が集会係を担当させていただきます。第58回新潟歯学会総会は4月12日（土）に開催予定です。詳細は新潟歯学会ホームページをご覧ください（<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>）。



教授就任講演 神子島 句子先生（第二回例会）



教授就任講演 堀 一浩先生（第一回例会）



第一回例会の様子

同窓会だより

多彩なテーマと講師陣 同窓会講演会・学術セミナーに ぜひご参加ください！

広報名簿部部长 加藤 幸生
(歯学科29期)

読者の皆様は新潟大学歯学部同窓会の講演会・
セミナーに参加したことはありますか？

今回は同窓会が開催している講演会やセミナー
について、紹介させていただきます。同窓会では、
卒後のスキルアップを目指す歯科医師・歯科
衛生士の皆様に向けて、多くの研修機会を設けて
います。毎年4月に開催される同窓会総会での学
術講演会、年に3回の学術セミナーがそれにあた
ります。

これらの講演会・セミナーは、新潟大学歯学部
の卒業生に限らず、他大学を卒業された地域で活
躍される歯科医師・歯科衛生士の皆様にもご参加
いただけるようになっています。さらに、同窓会
員・準会員の方は安価に（条件によっては無料
で）受講することができます。卒後も継続的に最
新の技術や知識を習得し、自己研鑽を続けられる
貴重な機会です。多くの皆様にご活用いただきた
いと考えております。

講演会、学術セミナーは、参加しやすさを重視

して、現地開催とZOOMを活用したオンライン
配信を併用しております。ご都合に合わせて現地
参加またはリモート参加が選択でき、遠方にお住
まいの方々や多忙な先生方にもご参加いただけ
るよう配慮しています。また、見逃し配信も行っ
ており、時間の都合がつかない方や後から視聴し
たい方にも対応しています。（令和6年度学術セ
ミナーⅡに関しては現地開催のみで行われました。）
今後も、ニーズに応じた柔軟な開催形式を取り入
れてまいります。

2024年度（令和6年度）は、以下のようなテ
ーマで開催いたしました。

- ・同窓会学術講演会 2024年4月21日
「神経科学や口腔-他臓器連関研究のおもしろ
さ」
新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生化学分野
照沼美穂 教授
- ・学術セミナーⅠ 2024年5月19日
「薬剤関連顎骨壊死の知見をアップデート」
滋賀医科大学医学部歯科口腔外科学分野
高岡一樹 教授
- ・学術セミナーⅡ 2024年9月1日
「障害者歯科は歯科衛生士が輝ける場」
(現地開催のみ)
新潟大学医歯学総合病院
小児歯科・障がい者歯科
大島邦子 病院准教授
- ・学術セミナーⅢ 2024年11月10日
「明日から役立つ口腔顔面痛と神経の深い関係」
北海道医療大学歯学部歯科麻酔科学分野
照光 真 教授



講演会・セミナーのパンフレット

それぞれのテーマは、現在の臨床現場に即した
話題や最新の研究成果に基づいた内容であり、参
加者からは多くの好評をいただいております。

同窓会学術講演会での、神経科学や口腔—他臓器関連研究についての講演では、生化学分野における研究結果の臨床への応用の可能性が示され、新たな視野を広げる機会となりました。

セミナーⅠでの薬剤関連顎骨壊死についての最新の知見は、治療方針やリスク管理において臨床の現場で即座に役立つもので、非常に有益な内容でした。



学術講演会の様子



学術セミナーⅠの様子

セミナーⅡの障害者歯科についての講義では、障害者歯科医療において、歯科医療関係者が持つべき知識や技法がとりあげられ、特に歯科衛生士が現場で果たすべき役割について、大変興味深いお話をいただきました。

今後も同窓会では、皆様の日々の診療に役立つ講演会・セミナーの企画・運営を行い、歯科医療の発展、地域医療の向上に寄与してまいります。出身大学を問わず、多くの方々の参加をお待ちしておりますので、この機会をぜひご活用ください。

セミナーⅢの口腔顔面痛に関する講義では、痛みの研究の歴史やそのメカニズムの詳細について、さらに臨床現場での痛みに対する具体的な対応方法まで幅広くご講義いただきました。

どうぞ今後とも同窓会活動にご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
昇任	R 6 . 11 . 1	丹 原 惇	歯科矯正学分野教授	歯科矯正学分野講師

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	R 6 . 8 . 31	笠 原 由 佳		生体歯科補綴学分野事務補佐員
異動	R 6 . 9 . 30	石 栗 真理子	自然科学系自然科学研究科事務室主任	医歯学系歯学部事務室学務係
異動	R 6 . 10 . 1	片 桐 菜 那	医歯学系歯学部事務室総務係	自然科学系工学部事務室
退職	R 6 . 10 . 19	監 物 新 一		高度口腔機能教育研究センター技術職員（再雇用）

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	R 6 . 9 . 30	宮 本 茜		歯科総合診療科特任助教
育児休業復帰	R 6 . 10 . 1	都 野 さやか	歯科総合診療科特任助教	

【看護・医療技術部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
育児休業復帰・所属換	R 6 . 8 . 1	水戸部 恵 実	東11階病棟看護師	東 3 階病棟看護師
採用	R 6 . 10 . 1	名古屋 宥 佳	歯科衛生部門歯科衛生士	
所属換	R 6 . 10 . 1	渡 辺 美 桜	東11階病棟看護師	東 3 階病棟看護師
育児休業復帰	R 6 . 10 . 15	吉 田 紘 美	東 3 階病棟看護師	



歯学部を支える方々

歯学部にも異動して来て

歯学部学務係 坂 上 亮

歯学部学務係の坂上（さかうえ）と申します。

令和6年4月に歯学部事務室学務係へ参りました。歯学部にも異動になる前は、五十嵐キャンパスの創生学部学務係にいました。同じ学務係でも、創生学部は学生が自ら到達目標を設定し学修を進めるのに対し、歯学部は資格習得を目的としていることが対照的で、本学が総合大学であることを実感しております。

歯学部へ来てから半年以上が経ちますが、業務を振り返りますと、以前の学務係ではなかった業務のためか、共用試験や臨床実習などが鮮明に思い返されます。個人的な印象ですが、創生学部は、（専門性等を）選択することに困難さがあると思いましたが、歯学部は到達することに困難さ

があるなあと感じております。

さて、歯学部学務係は歯学部・医歯学総合研究科（歯）の両方の事務を担当していますが、私は、歯学部をメインに、授業・実習、共用試験などの教務全般に関する業務や、広報関係、入試の受付・準備設営などの業務を担当させていただいております。幅の広い業務ではありますが、事務室の方や先生方から協力により遂行しており、大変感謝しております。

「歯学部を支える方々」とありますが、こちらこそ支えていただいている現状ですので、日々業務に精進し、歯学部を支えるようになりたいと思います。

今後とも宜しくお願い致します。



編集後記

今回歯学部ニュース編集委員を務めさせていただきました兒玉と申します。私が担当させていただいた記事は歯学部の1年生から始まり、臨床研修医、大学院生の先生方に執筆していただいたものになります。自分がたどってきた道でもあるのでとても懐かしく記事を読ませていただきました。また、OBの先生にお会いした時に「歯学部ニュース読んでいるよ」とお声がけいただき、学外への情報発信の重要性も改めて実感しました。そのような雑誌の編集に少しでも携わることができて大変光栄でした。最後に、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

包括歯科補綴学分野 兒玉 匠平

まず初めに、秋頃から年末年始にかけてご多忙のところ原稿執筆にご協力いただきました先生方、学生さんに心より感謝を申し上げます。この度、「SSSV活動報告」「ポリクリを終えて」「学会受賞報告」「退職によせて」「技工部だより」を担当させていただきましたが、原稿を通して先生方や学生さんのこれまでのご活躍を知ることができ、とても良い機会となりました。また、このような皆様の長年のご活躍が掲載された歯学部ニュースの編集業務に携わることができ、大変光栄に思っております。ありがとうございました。

予防歯科学分野 星野 剛志

今回初めて編集委員を務めました。

歯学会のプログラムと歯学部同窓会の編集も同時に務めていたため、この1年間でかなり多くの先生方・学生の皆様および職員の方々と原稿のやり取りをさせていただき、大変貴重な経験になりました。寺尾先生をはじめ、編集長中村先生、ご寄稿いただいた方々に感謝を申し上げるとともに、微力ではありますが歯学部ニュースの編集に携われたことに、達成感を感じております。この経験を他の場でも活かしていきたいです。ありがとうございました。

予防歯科学分野 皆川 久美子

歯学部ニュース146号をご覧ください、誠にありがとうございます。本号では“歯学部生の活動”として、再開された「短期海外交流プログラム」の活動報告を、“歯学部のデジタルデンティストリー”において、4講座の先生方から教育や研究におけるDXの現状をご紹介いただきました。本号を通じて、歯学部の取り組みや歯学部生の活動に触れていただけましたら幸いです。

ご寄稿いただいた皆様、編集に多大なご尽力をいただいた編集委員の先生方と寺尾先生、そして本誌をお読みいただいた皆様へ、心より感謝申し上げます。

小児歯科学分野 中村 由紀

歯学部ニュース

令和6年度第2号（通算146号）

発行日	令和7年3月13日
発行者	新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者	中村 由紀、寺尾 豊
編集委員	兒玉 匠平、星野 剛志 皆川久美子
印刷所	(株)ウィザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙・裏表紙の撮影データ：

撮 影 地：新潟市（新潟大学歯学部）

撮 影 日：2024年4月

使用機材：OLYMPUS PEN-F／M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO／
焦点距離：12mm・絞り：F5.6・シャッター速度：400分の1秒（絞り
優先自動露出／+1/3ステップ補正）・感度：ISO200・ハイレゾショット
（画像サイズ8160×6120・5000万画素相当）

コメント：（国立大学法人新潟大学 環境・社会報告書2014「歯学部の桜の来し方」
から一部更改して転載）

20年近く前まで、歯学部の市役所側の角に植えられていた桜は、幹線道路の真正面に位置し、新潟市内で最も早く開花する桜として、長年にわたり市民に親しまれてきました。面する国道116号線は交通量が多く、特に歯学部近くの学校町付近は大きく市役所を迂回するコースとなっていたため、渋滞の発生や交通事故の多発など多くの問題を抱えていました。そこで当時の建設省は、昭和63年（1988年）より交差点改良事業をすすめ、その後若干のコース変更案が提示されたのちに、当時の歯学部附属病院の南側は大きく削られることとなり、皆の心の癒しとなっていた桜や松などが伐採の危機に直面しました。新潟大学としては樹木の保存について要望を出していたところ、国土交通省がその声に応じて市役所前交差点の4本の桜の木（ソメイヨシノ）について、樹木医の診断を得て保存に踏み切ることとなり、これらの桜は平成16年（2004年）秋から翌年3月にかけて、現在の場所であるBSN学校町駐車場（現・しなのパーキング）側の角に移植されました。これら4本は当初危惧されたように枯れることはなく、20年近くのあいだ驚異的な生命力を維持し続け、毎年4月中旬前には満開の時季を迎えています。もともとこの桜がいつ植樹されたのかについては明確な記録はないものの、先達の方々の記憶を辿ると昭和48年（1973年）度後半と推測され、50年以上経過しているということになるようです。

国立大学法人新潟大学 環境・社会報告書2014アドレス：

<https://www.niigata-u.ac.jp/wp-content/uploads/2016/03/kankyohoukokusho2014.pdf>

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：OLYMPUS PEN-F, OM SYSTEM OM-5

レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO, M.ZUIKO DIGITAL
ED 12-100mm F4.0 IS PRO

撮 影 者：林 孝文



リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙、
リサイクルできます。